325
364

老監督

AN AGED BISHOP

By T. ARITOMI

有富虎之助著

325-364

帝國圖書館藏

有富虎之助著

老

監

督

紅潮社

大正
4. 7. 28
内交

露光量違いの為重複撮影

ウイリアムス翁小傳

一千八百二十九年七月十二日、北米合衆國ヴアージニヤ洲リツチモンド市に生る。一千八百五十三年ウイリアム・エンド・メーリ大學を終へ、更にバージニア神學校に學ぶ。一千八百五十五年同校卒業、同年七月一日アレキサンドリア市聖保羅教會に於て按手禮を受け、同十一月宣教師として支那に派遣せらる。一千八百五十九年六月日本傳道を命ぜられ、居を上海より長崎に移す。一千八百六十六年十月三日召還せられ、紐育聖約翰教會に於て日本支那監督に任ぜらる。一千八百六十七年コロムビア大學より神學博士の學位を受く。一千八百六十八年(明治元年)一月十五日上海着。翌年十一月居を大阪に卜せらる。一千八百七十三年江戸監督に任ぜられ。居を東京に移す。同時に支那監督を免ぜらる。一千八百八十九年春米國大會出席のため歸國、同年十月江戸監督を辭す。一千八百九十六年二月歸朝、居を大阪に卜し長老として教職をとる。一千八百九十九年京都烏丸の粗末なる新居に移り、一千九百八年四月二十九日遂に歸米。一千九百十一年十月二日永眠す。

序文

イエス嚴く戒めて之に曰けるは愼て人に知らす勿れ、然ども彼等いでゝ遍くエスの名を播めたり。(太九〇卅、卅一)

監督神學博士チャンニング・ムアー・ウイリアムス先生の傳記を公けにする事を聞きて直ちに浮び來りし聖語は是なり。

監督の生涯を一貫せる主義精神は全く自己を沒し其生涯を終らん事にてありたり。其五十年公私の生涯は實に之を實行したる勝利の生涯にてありたり。故に故人の好まざる事を爲すを以て禮に非ずとせば監督の傳記を公けにするは全く爲すべからざるの事に屬す。

友人有冨虎之助君先きに基督教世界記者として大阪に在るの日深く監督の人物に感じ其言行を紙上に連載する事數十回に及びしが、今や多くの教友の求めに依り之を增補訂正して一小冊子となさんとし、書を寄せ一言を卷首に載せん事を囑せらる。

露光量違いの為重複撮影

ウイリアムス翁小傳

一千八百二十九年七月十二日、北米合衆國ヴアーヂニヤ洲リツチモンド市に生る。一千八百五十三年ウイリアム・エンド・メーリ大學を終へ、更にバーヂニア神學校に學ぶ。一千八百五十五年同校卒業、同年七月一日アレキサンドリア市聖保羅教會に於て按手禮を受け、同十一月宣教師として支那に派遣せらる。一千八百五十九年六月日本傳道を命ぜられ、居を上海より長崎に移す。一千八百六十六年十月三日召還せられ、紐育聖約翰教會に於て日本支那監督に任ぜらる。一千八百六十七年コロムビア大學より神學博士の學位を受く。一千八百六十八年(明治元年)一月十五日上海着。翌年十一月居を大阪に卜せらる。一千八百七十三年江戸監督に任ぜられ。居を東京に移す。同時に支那監督を免ぜらる。一千八百八十九年春米國大會出席のため歸國、同年十月江戸監督を辭す。一千八百九十六年二月歸朝、居を大阪に卜し長老として教職をとる。一千八百九十九年京都烏丸の粗末なる新居に移り、一千九百八年四月二十九日遂に歸米。一千九百十一年十月二日永眠す。

序文

イエス嚴く戒めて之に曰けるは愼て人に知らす勿れ、然ども彼等いでゝ遍くエスの名を播めたり。(太九〇卅、卅一)

監督神學博士チャンニング・ムアー・ウイリアムス先生の傳記を公けにする事を聞きて直ちに浮び來りし聖語は是なり。

監督の生涯を一貫せる主義精神は全く自己を沒し其生涯を終らん事にてありたり。其五十年公私の生涯は實に之を實行したる勝利の生涯にてありたり。故に故人の好まざる事を爲すを以て禮に非ずとせば監督の傳記を公けにするは全く爲すべからざるの事に屬す。

友人有冨虎之助君先きに基督教世界記者として大阪に在るの日深く監督の人物に感じ其言行を紙上に連載する事數十回に及びしが、今や多くの教友の求めに依り之を增補訂正して一小冊子となさんとし、書を寄せ一言を卷首に載せん事を囑せらる。

余は個人の關係よりせば堅信禮を授けられたる監督なり。三年の間日夕起臥を共にせる師父なり。職務より云へば余が聖職の初年に於て補助者として役きし指導者なり殊に始めて堅信禮の式上殆ど余をして神の人と思はしめたる記憶あり。晩年米國リチモンドに於ける一聖日、共に會衆の一人として禮拜式に列し、手を執り相助けて馬車より降ろし、祈禱書聖歌集さへ相開きて示せし老境に至る迄の聖徒の面影は一日として忘るゝ能はざる聖き記憶なり。今や有冨君の筆に依りて之を公にせらる。故人の好まざる所なるも余が敢て之を賛成し、一言を書するの光榮を辭せざるは又實に癒されたる者が主の命に背きてイエスの名を播めたるの心事なり。

願ふ所は之を讀むの人此高き人格を通じて其背後に立てる更に高き否寧ろ其源泉たりし神人基督の聖き人格を知るに至らん事なり。是れ實に余が祈禱なり、又著者の願ならん。

名出保太郎謹識

はしがき

□キリストに縁れるほか、私はウイリアムス老監督と何等の關係もなかつた。故に一面識もない私が老監督の傳記をものしやうなどとは、誰も豫想しなかつた處であらう。私自身も一種不可思議に感ずるのである。乍併生前面識なき私がはしなくも其德風を望み筆を取らではやむ能はざるまでに崇敬愛慕の念を發したことは、軈て老監督の德行の凡ならざるを語るものではあるまいか。

□私は初め數回にて完結する積りで基督教世界紙上に筆をとつた。然るに章を重ぬるにつけ、種々なる材料を提供せらるゝ人あり。遂に三十餘回に及んだ。故に書中重複せる所なきにあらざるも、玆には其儘にして發行することゝした。

□曩に發行せられた元田作之進氏の『老監督ウイリアムス』中、「監督の人格」の一章は、私の此「老監督」によつたもので、中には拙文其儘を採用したところが

はしがき

少くない。然るに其序文には、私から此原稿を借りたと云ふことが全然記載してない。私が元田氏の著から材料を採つたと思はれては迷惑だから、一寸一言しておく。

大正四年七月十五日

著者

目次

發端……一頁
翁の父母……二
献身……四
愛人愛邦……六
清貧主義（一、二）……一〇
献金……一六
救恤……一九
傳道（一—六）……二二
翁の説教（一、二）……四四
翁の祈禱……五一

寛容……五五
意志の人（一、二、三）……六一
高徳の人（一、二、三）……七〇
翁の平生（一、二、三）……八一
翁の肖像（一、二）……九〇
翁の著書……九六
歸國……一〇〇
永逝……一〇二

老監督

有冨虎之助著

一　發端

老監督

發端　我日本基督教界の母なるシー・エム・ウイリアムス翁の永逝は明治四十三年十二月二日であつた。さうして同じ月の同じ日に我が教界の宿老なる奥野昌綱翁が永き眠に就かれた。我等は地球の一面と他の一面に於て、我日本のために祈禱と努力とを以て盡せる最初の牧師と宣教師が、然も同日に召されて神の國に行き給ひしを見て、唯偶然の出來事として之れを看過することは出來ない。實に一種無限の感想に打たるゝのである。ウイリアムス翁は明治四十一年四月廿九日に彼の熱愛する日本を辭して故國に歸られた。予は陰ながら感謝の涙を以て之を送つたのであつたが、

今や其訃を傳へ聞いて、感慨無量、彼の古の聖徒に等しき老監督を偲ばざるを得ないのである。

二　翁の父母

翁の父母

ウイリアムス翁は一千八百二十九年七月十八日に北米なるヴアジニヤ州リッチモンドに生れた。其處は昔信仰の自由を確執して時の英國政府の爲めに國を追はれ、一千六百二十年の十二月メーフラワ號に乘じて太西洋を渡つて來た清教徒の居を定めた處で、翁は勿論其ピルグリム、ファザーの子孫である。彼の家は農であつて、父は翁が幼少の時或る戰爭に參加し不幸にも戰死したので、彼は夙くより母の慈愛の懷に抱かれて淋しい月日を送つたのである。母は敬虔にして篤信な淑女であつた。是れは凡ての偉人に共通必有の現象であるが、翁の母も決して並々の方ではなかつた。曾て監督がいはれた事がある。幼き時のこと、或大雪の日曜日の

朝家人は餘り寒いので教會に行く代りに家にて禮拜する積であつた。其時母が窓の外を見ると老牧師が雪を犯して教會に行く所であつたので、母は直に家庭禮拜をやめて幼兒等を引つれ教會に行かれた。又演劇は堅く禁ずる所であつたが、翁が十二歳の時觀に行きたいと云はれると演劇は決して見るべきものでないが、お前が生涯又と行かぬと誓ふなら十五になつた時一度觀に行きましやうと約し、三年後の其日に、こちらは忘れて居るのに約をふんで連れて行かれたさうである。其後大學在學の折、已を得ず觀劇せねばならぬ事となり、態々電報で母の承諾を得て始めて行かれたさうである。翁は幼時體格前に曲み胸部狹く、極めて蒲柳の質であつたが、母は袴つりの肩の處に鳥爪形の鐵を附け、前に俯けば胸を擦る樣にして、嫌がるのを耳にせず、遂に八十二歳まで鑠鑠たる健康を作り上げたとの事である。以て如何に彼女が神の前に虔しやかに、肉にも靈にも圓滿完全なる人物を作らんと努めたかを知ることが出來ると思ふ。

三　献身

献身

ウイリアムス翁の家はリッチモンドでは舊家で、今日でもウイリアムス家といへば所謂家柄として多くの尊敬をうけて居るさうである。曩にも誌せし如く翁の献身犧牲の生涯は全く母の賜物で、翁は常に母君を懐ひ出でては涙を流しつゝ、其懐舊談をなして、人前をも恥とせられなかつたさうである。

まことや母の膝は最も神聖なる教壇である。翁の敬虔熱誠なる信仰は實に此母の膝に於て養はれた。其上彼は信仰の自由のためには帝王の權威を以てしても尚屈しなかつた祖先即ち清教徒の血をうけて居る。彼の傳道者たるべき資格は生れ落つる時から作られて居つたのである。そこで長ずるに及びて傳道者たるの志を起し、母も之を是としたので、夫々其みちの學問を修得し、一千五百八十五年愈々神學の科程を卒ふるや、雄々しくも支那傳道を思ひ立ち住みなれし故郷と、懐かしき母君

とを後にして、遙々東洋の天地をさして出立した。所が神は彼を永く支那に留め給はず、幾何もなくして我日本に送られたのである。時に一千八百五十九年我が安政六年五月の末で、我が國では恰も開港條約が愈々締結せられ、尊王攘夷の聲は四方に漲り海内騒然として實に鼎の湧くが如き時であつた。彼時に年三十歳。骨を埋むる豈故郷の山のみならんや人間到る處青山ありとは云つたものゝ、如何に血氣の青年なりとて、眞に神の使命に感奮興起せずんば、どうして斯る間に飛込んで來る事が出來やうか。翁の如き人こそは實に「爾曹往きて萬國の民に福音を宣べ傳へよ」との主の御言に感激して、其生涯を靖献せられたものと云はねばならぬ。斯る時代なれば元より公然と傳道などは出來ない、耶蘇教とでも云はうものなら、帽子の臺が飛んで仕舞うのである。彼等は元より殉教の覺悟はある、血を見るは寧ろ光榮とする所であつたであらう。が然し死んでは駄目である。石にかじりついて居ても生を完うせねばならない。彼等は口にキリストを説く事は出來ない、故に行爲を以て

之を現さんと努めた。即ち德行を以て我國民の心眼を開かんとしたのである。『口あれども語る能はず、筆あれども誌す能はざる此時に於て、オ、神よ願はくば我等の行を以て汝の榮光をあらはすことを得せしめ給へ』とは彼の朝夕の熱禱であつたに違ひない。宜なる哉、一度彼の溫容に接したるものをして、陶然として春風に坐するの感あらしめ憧憬愛慕、再び忘るゝ能はざらしめたることや。

四　愛人愛邦

愛人愛邦

誰か其傳道せんとする國土民族を愛せぬものがあらう。我國と云はず世界至る所として宣教師が、其派遣せられた國土を愛せずしては宣教の使命を完うすることの出來ないのは當然である。然るに多くの宣教師の中には隨分酷どい人物もあつて、口に滔々と愛人愛邦の言葉を吐きながら、其の實は己れのみが優等人間であつて、他は劣等人種と蔑視し、甚しきは我が民族の缺點惡癖などを殊更に取

立て、本國に報告する者もあつた樣に記憶する。

我ウイリアムス翁は實に日本國を愛した。予は彼ほど我日本を熱愛した宣教師を知らない。彼は花嫁が我家を捨て夫の家に入る樣に、米國と云ふ生家を後にして、日本と云ふ夫の家に入つたのである。彼は確かに我國を以て死場所と定めてをつた。昔佛蘭西の女傑ジャンダークは人に婚嫁をすゝめられた時に「我既に佛國に嫁せり」と云つて一言の下に卻けたさうであるが、我ウイリアムス監督も生涯妻らず、單身孤獨の生活で通されたのである。宣教師と云へば美しき妻を携へ、花の如き子女に圍まれ、高閣に起居し佳味美食をなし、外國傳道といふものは其美しき妻と、花の如き子女の慰藉とがなければ不可能の事業であらうかと我等をして思はしむるのに、生涯獨身で通されたウイリアムス翁は何に慰めを得、何に滿足を得て、永い歳月を淋しいみじめな生活で過されたであらうか。思ふに之れは餘りに傳道に熱心な結果、瑣々たる一身の問題を顧みるの暇がなかつたと云ふ理由ばかりではな

い。彼はジャンダークの云へるが如く日本に嫁いたのであつた。彼のスキートホームは神の國で、彼の子女は彼の祈りによつて生れたる多くの信徒であつた。而して彼を慰むるものも勵ますものも神の靈であつたのだ。翁は日本に來らるゝと同時に凡て生活の標準を日本にとつた。何もかも日本人になつたと云ふ目安で取り賄はれた。是れ實に翁が日本を愛し日本人と同化せんための所爲であつて、迚も他の歐米人の模し難きところである。」

翁が如何に日本を愛し、日本のために圖つたかに就ては枚擧に遑がない。唯茲には其一二を誌すのみだ。彼の東京築地の聖三一大會堂は、當時四萬圓を投じて建築したもので、其金は全く翁一人の喜捨によりしものなるが、場所柄と云ひ、日本人側では之は西洋人等の禮拜堂であらうと憶測し、又洋人も自分等を主として用ゐらるべきものと思つたらしい。然るに落成早々司牧の職にあげられた今の川口教會の名出保太郎氏が「監督さん、之は西洋人の教會ですか、又日本人を主とした教會で

すか」と問ふた時「私は日本國に此會堂を捧げました、日本人主であります」と答へ、言下に衆人の疑惑を解かれたさうである。而して日本の傳道は日本人之を經營すべしと云ふ樣な事も夙くより唱へて居られたやうである。

又彼の切支丹禁制廢止の如き、慶應二年翁が歸國せられた時、華盛頓政府に出頭して英國政府と協同して日本政府に、これが廢止を勸告せられんことを陳情書を以て上申したが、越えて四星霜、遂に明治六年二月廿四日に彼の切支丹制札撤去の布令となつたのださうで、之には他にいろ〳〵事情もあらうが翁の斡旋が與つて力あつたとの事である。又曾て二十餘年目に歸休せられた時米國には久振で嘸ぞ愉快でしたらうと或人が云つたら、私のために米國は外國です、神に祈るべき教會も友人も事業も、皆此國(日本)にあります、米國は淋しいですと答へられたさうである。

此の日本を熱愛して、洛陽若王寺の山巓を我埋骨の地と定めてをつた老監督も、寄る年波は奈何ともすること能はず、目は矇り手足は痿れ、到底其の職(休職なれど

翁自身が神の前に負へる傳道てふ職）にたへざるを知るや、唯一個の杖と提鞄を手にして漂然歸國の途に上られ、京阪の極めて昵親な牧師達の外誰も知るものはなかつた。明治四十一年四月廿七日米國行の滊船が横濱埠頭を離るゝや、寥らしき一老翁が、船室内に跪坐默禱時の移るを知らざるもの丶如くであつたが、これは云ふまでもなくウイリアムス翁であつた。

五　清貧主義

清貧主義（一）

翁を語らんとするに何人も見のがす可らざる事は、其勤儉克己の生活である。是は實に翁が西洋人と云ふ殼皮をぬいで、日本人を標準とし、日本の教役者に自ら其模範を示して、神の前に聖潔なる傳道的生涯を送らしめんためで、又一面には斯くして貯へた財を蠹ひ銹び鏽らざる天に積む考へであつた。凡そ儉約は其の半面の事實を見のがす人には、往々吝嗇と誤らるゝ。若しも世人が我が老監督

のみじめな生活を表面からばかり見るならば、吝嗇翁守錢奴等の賤しむべき名稱を附するに躊躇しないであらう。然り、彼は實に人の前には殆んど極端な吝嗇家であつた。然しながら此のみじめな清貧生活も、皆基督の榮えの爲めである。活くるも主のため死ぬるも主のためと信ずる翁には、世の中の毀譽褒貶は毫も意とする所ろでない。唯だ神の聖前に如何に富める生活を送らんかゞ、彼の旦暮の苦心であり又祈禱であつた。

我等は彼の日々の生活に就て見る時に實に深き崇敬の念を起さゞるを得ない。監督と云へば聖公會では最上位の聖職である。是れには監督給と云ふもの丶外に、宣教師としての俸給もあるから、月七八百圓位の俸酬はある者ださうだ。然るに翁は一ケ月僅かに十五圓の生活費でやつて來られたと云ふ事である。十五圓と云へば中學生の月費にも足りない。夫れ位であるから、冬になつてもストーブを燃かない、室には敷物もない、窓掛けもない、裝飾などは勿論ない。隙間を洩る丶寒風はなかな

かに老體に泌みたことだらう。偶々人が訪問して監督さんストーブを燃かれては如何ですとすゝめると「イエス樣の時代にはさう云ふ者はありませんでした」と答へられたさうである。

是れは保羅教會牧師山田祐氏の話であるが或冬京都烏丸の寓に翁を訪問せらるゝと、何時ものやうにストーブもない書齋に水鼻を啜つて居られた。粗末な日本建であるから、敷物のない床板の空隙からは氷のやうな冷い風が入つて來る。一寸坐つて居るさへ肌に粟を生づる位であつたので、山田氏が「監督さん好いことを敎へて上げましよう、紙で目張りをなさい寒い風來ませんから」と敎へた。老監督は「有難う試みましよう」と云つて、其後再び氏が訪問せられた時は西洋新聞紙で張つたのが既に處々破れてをつた。ソコデ山田氏は又監督さんこれは日本紙でなければいけません、仙花と云ふつよい紙があります云ひますと、翁は「夫れ高價でせう、これ大變廉い唯です、破れたら何遍でも張ります」と云つたとの事である。

清貧主義(二)

六　清貧主義

翁の衣服は何十年前に調へたか分らない代物であつた。裏返し、繕縫、補綴、みぐるしいと云ふ程度を超へてをつた。左れば京都あたりでは、知らぬ人は乞食異人、乞食異人と云つて居つた位だ。曾つて翁が丹後の宮津に傳道に行かれた時、歸途に汽船に乘らうと思ひ待合所に入つた。スルト事務員は此破衣弊靴、破れ提鞄の乞食異人を見て「オイ〳〵貴樣乞食じやないか、ソコに坐るな、アッチに行つて待つてろ」と叱つた。翁は叱らるゝまゝにハイハイと頭を下げて隅の方に少さくなつて居られたが、やがて土地の牧師や有志家達が見送りに來られ、下にも置かぬ待遇に先の事務員は事の由を聞きて恐れ入つたと云ふ事がある。コンナ事は一々あぐれば枚擧に遑がない。聖公會の制服は無地の黑羅紗と限られてある然るに翁は縞柄の見ゆる黑服を着けて居られる事があつた。而して時には上衣と袴とは似

もつかぬ服を着て居られたこともあつた。是は古洋服店を漁り廻はして恰好のものを購ひ、それを染め更へ、仕立直して用られたのであつたとの事である。着物のことにつきて面白い事がある。翁曾つて神戸より米國船に便乘して横濱に行かれた。其船長は翁が初めて支那に赴任さるゝ時の便船の乘組員であつて、互に久濶を述べて驚かれた事であつたさうだが、其船長が翁のみじめな容姿を見て「ウイリアムさん服は古びたなら裏返へしたら經濟です」とさも發明らしく敎へた。スルト翁は「ハヽ、此通り裏かへしのが更に又初に歸へつたのです」と云つて、互に顏を見合せて笑はれたと云ふことである。

外國の宣敎師が來られる時に第一番に用意をして待たねばならぬものは會堂や說敎所でなくて彼等の住むべき館である。働くところでなくて憩む所の設備である。然るに我がウイリアムス翁は、晩年に至り京都烏丸に些かなる住宅を建つる迄は、監督と云ふ榮職にありながら、自己のために一軒の家を建てられなかつた。而して

時には學生と共に寄宿舍の一隅に起居し、時には狹ま苦しき敎會堂の片隅に棲居せられた。狐は穴あり、空の鳥は巢あり、されど人の子は枕する所なしとは眞に翁のことである。彼は主のみあしの跡をいかにして踏み行くべきかと唯夫のみをつとめたのである。

こんな風であつたから食事の如きも極めて質素で、外の西洋人の如きは驚きの目を以て見てをつた。どちらかと云へば菜食主義で、馬鈴薯と胡羅匐のスチウの如きは尤もよく翁の食卓に上るのであつた。さうして一週たつた一度、日曜日の晝食は翁にとつては非常の御馳走で、夫とてもビステキ一皿であつたが、此時は敎友や靑年などを招で、樂しく一皿づゝの御菜でパンをかじるのであつた。日本人と同生活をすると云ふことは翁の希望で、或年の如きは全然日本食を斷行せられ、飯は勿論一切日本の料理を用ゐられたが段々と衰弱せらるゝので遂にそれ丈けは中止せられた。翁は甘黨であつた。併し贅澤な舶來の御菓子などは決して用られなかつた、多

くは日本の蒸菓子や饅頭であつた。而して來客などにも五厘か一錢の饅頭を唯一個だけ出された。紅茶ややコーヒなどに砂糖の入れやうが多いと云つては客の前でもツ、ンと暗號的お叱りをコックに與へるのが常であつたとのことである。

七　献金

献金

翁の克己的生活に就ては既に其大略を記した。其他、傳道地を巡回せらるる際にはバタのついたパンを幾個となく新聞紙に包んで携帶されるのが常であつたが、其紙を一々叮嚀に皺をのべて持返り三度も四度も用ゐるが例なりし事。來翰の餘白や不要の刷物など、苟も白い部分のある紙は翁の原稿紙で、翁が最後の著述たる「教會史」「日本聖公會史」の如きは實に此客な原稿紙に書いたものであつた事などを見ても、如何にウイリアムス翁の自ら奉ずる所ろ薄かりしかを知らるゝであらう。世には自らの利殖のために隨分食ふか食はずに金を貯へて飽く事を知ら

ぬ者がある。彼等は自ら奢侈淫逸の生活をせんためか、左なくば金貨の顏を見て微笑むのが其目的である、社會公共を念とするものなど殆んどない。然るに翁のは神の爲であつた、基督のためであつた。人のためとか社會のためとか云ふ念すら全然ない。左れば彼は斯る克己清貧の生活をなして多くの慈善救恤をなしたが、是れは決して其によりて世に名を得、人に譽を得るためではない。故に翁は公共の寄附金や義捐金の募集には決して應ぜられなかつた。これ其名の現はれんことを恐れたからである。翁によつて安を得た鰥寡孤獨は之を知ることは出來ぬ位であつたが、これとても彼等の窮乏を見るに見かねてゞもなく、貧しき者を恤はすはエホバに貸すなりてふ一種の應報的の考へでもなく、實に聖書の所謂「神なる父の前に潔くして穢れなく事ふることは、孤子と寡婦を其患難の中に眷顧こと也」てふ聖訓を其儘に實行せられたのに外ならぬ。

翁は斯くして貯蓄た金を以て總て神に捧げた。會堂の建設、苦學生の扶助、寡婦

孤兒の救助等には財布の許すかぎり之に盡して惜まなかつた。先づ會堂で云へば東京の三一大會堂である、あれは其當時（明治十九年頃）四萬圓を要したもので皆翁一人の出資になつたものであるが、其の椅子の如き今日では一脚百數十圓でなければ出來ぬものださうだ。其質素にして而かも莊嚴なるは我國に於ける新敎會堂中第一に位するものである。其他東京方面で麹町の聖愛敎會堂、神田の神田基督敎會堂淺草の聖約翰敎會堂、關西地方で大津敎會堂、岸和田聖保羅敎會堂、若狹小濱聖路加敎會堂など何れも相應な經費を要したものであるが、それが皆ウイリアムス翁一人の喜捨になつたものださうだ。而して翁が最後の紀念となつた京都四條橋畔の聖約翰敎會堂の如きは世間では一萬圓と云つてをるが其實は約三萬圓を要したので其ため翁は歸國して本國に所有せし不動產を賣拂つてまで其不足を補はれたと云ふことである。何と驚くべき事ではあるまいか。「事實は之れに止まらない、聖公會は我國各敎派の中でも最も多く慈善的事業を經營して居る敎派であるが、彼の有名な東

京瀧野川學園の如き、舊築地にあつた救育院の如き、今の大阪の博愛社の如き皆陰に陽に其大部分を翁の助力に俟たないものはなかつたとの事である。」

八　救恤

救恤　併し是等は翁にとりては最と少さき事であつた。翁は眞に陰德の君子であつた。「爾曹施濟をなす時右の手になすことを左の手に知らする勿れ」てふ聖訓をそのまゝに守られし聖徒であつた。我名の現れんことを恐れて極めて隱密の間に人に施し、人を助け、其當人にすらもそれを知らせない樣につとめた。

翁のために養はれた貧書生は實に夥しいものであるが、彼等自身にも己が學資が何處から出て居るか知らぬ位だから、他人が知らう筈はない。立敎學校などに學んで居つた多くの給費生は我が學資の何人より出て居るかを確めんために、ウイリアムス校長の下に至り「監督さん、私の學資は誰方が出して下さいますのですか」と

尋ねると「マア御心配なさるな、或人が喜んで出して下さります、學生は勉强が肝要です」と夫れ以上何も云はれなかつたが、其の或人とは皆監督自身であつたとのことだ。曾て某なる人が山口縣の某中學教師となつてゐた。不幸にして任地で三人の子と妻とを殘して病死した。其時今の大阪約翰教會の早川氏が見舞に行かれるので、翁は一通の書翰を托されたが、不幸某氏は早川氏の到着前に永眠せられた。氏は未亡人のためにウイリアムス翁の書翰を讀んで聞かせたが、其中には「若し貴下が召されて天に昇ることあるも、後の事は案じ給ふ勿れ、三人の子供の教育と貴下の妻の生活費は我之れを引受くべければ云々」と書いてあつたとの事である。かう云ふ事情の下に翁に援けられてをつた人が、人の知らぬ所に幾人となくあつたと云ふ事である。

翁は貧窮者を訪れたり、病人を見舞つたりして、先方の知らぬ樣にソット物の陰や床の下に金を入れてをかれた。またクリスマスなどには夕方人知れず貧困な會員の家を訪ひ、窓から金や贈物などを挿入れて立去るのが常であつた。餞別なども決

して事々しく紙に包んだりせずに、見送りの際にグットバイと握手する時、手品のやうに紙幣を手移しにするので、こちらも詮方なく其まゝに納めねばならなかつた。だから傍の人は知る由もない。是に就ては面白い話がある。曾て某が米國に留學する時、翁は之を新橋に見送りて例の如く紙幣の手移しをやられた。所ろがどう云ふ間違にや、其は新聞紙の片であつたので、某は其眞意を謝せんため友人に傳言した。そこで其友は後で監督に面し、友人に代りて謝意を表した。監督はソンナ事はないと例の如く知らぬ顏をせられた。然るに實は斯樣々々と語るや、監督は驚くこと一方ならず、直にポケットを調べしに果して紙幣は依然として殘つてをつたので全く右と左とを間違へての失敗なりし事を物語られ、早速書を送りて罪を謝し、一方本國の親戚に依賴して金を送る手筈をとられたさうである。

翁はコックを買物にやつて雜貨や日用品を買ふ時に、「ソレ高價です、モット安いのとかへて來て下さい」と云つて賣ひ換へにやられることが多かつた。コックは之れ

を厭うてアノ吝爺めと陰口をきゝながら使した。或コックの如きは永い間奉公してをつたが餘り度々買ひかへをやらされるので、「監督さん、私には迚ても貴下のコックは出來ませんからお暇を頂きます」と申出でた。翁はさうですか、ソレは致方ありませんとて、やがて百何圓と書いた貯金通帳を持つて來て、「此れはお前さんを買ひかへにやる時の差額をお前のために貯蓄したものだからお前のものですよ」と彼の前に差出した。是を見て流石のコックも驚愕其極に達し、お暇乞の撤回をして益々忠勤を勵んだとの事である。人の子の來るは人を使ふためにあらず、反て人に使れんためなりてふ主の御言が、こゝにも躍如たるを見るではないか。一人のコックの老後を思ふ此一事にても翁の全體が覗はるゝ心地がする。

九　傳道

傳道(一)

ウイリアムス翁の生涯は何と云つても傳道の生涯であつた。彼は祈を以

て日本に來り祈を以て日本を去られた。常住坐臥、神の聖旨を人に傳ふると云ふ外、何事をも意とせられなかつた。否な天地自然が作爲なしに神の榮を現はす樣に、彼の行爲その者が凡て神の愛の表現であつた。翁は旅行する時汽車は常に三等であつたが、車中で誰彼をかまはず「貴方、私何處の國の人に見えますか」と問ひ「西洋の方でしよう」と答ふれば「違います、私顏西洋人、心日本人あります」と語り「貴方もやはり日本人でしよう」と云はれでもすれば「さうです、さうです」と惠美須顏をして、夫れをきつかけに傳道を試みられたと云ふことである。

この章を誌すに當り、先づ云はねばならぬことは、我國初代基督者の傳道的困難である。是は實に吾人の想像の外である。殊にそれが彼等宣教師にとりては一入であつた。汽車もない汽船すら滿足なものはない。大抵までは徒歩主義で、惡路峻阪を踏み破らねばならなかつた。毛唐人と云ふので、田舍などでは泊めてくれぬ許りか、虐待する。暮れかゝる日に遠い隣村へと辿る、已むなく露營の夢を結んだ事も

珍しくない。實に不自由、困苦、迫害、有らゆるものゞ戰はねばならなかつたのである。故デビス博士が來朝の時我住家を建つる積りで、一切の大工道具を持參せられたさうだが、是等の不自由を傳聞せられては、誠に無理からぬ次第である。ウイリアムス翁の如きは實に具さに此の辛慘を嘗め盡された。彼は五十年の間已むを得ざる場合の外は馬車や人力車に乘ることなく、足を樁木にして傳道せられた。主は弟子達を遣さんし給ふて「爾曹一の杖の外旅の用意に何物をも携ふることなかれ」と命じ給ふたが、ウイリアムス翁はバタ付の麭を三四日分古新聞紙につゝんで聖書と一緒に破れ鞄に入れて、杖をさへも携へずに傳道旅行をせられた。かう云ふ風に地方傳道でも出來る樣になつたのは、勿論ズット後の事に屬し傳道も非常に進歩してからの事で、辛苦艱難の仕甲斐もあつたが、翁の長崎時代即ち傳道の當初は所謂切支丹禁制の時代であるから、其困難や實に想像の外である。邦人にして彼等に近く者あらんか、宣教師の門を潛つたと云ふ事夫れ自身が、既に獄裡の人たる廉とな

つたのである。それも熱心求道の士ならば心中聊か慰むるものがあつたのであらうが、左の如き實話を聞くに至つては何と情ない次第ではないか。思ふに翁も茲に至つて希望の光もたえなんとしたであらう。

或時の事である。深夜一人の者が門を叩いた、監督は大く喜ばれて之を室に通すと、彼は四壁に人なきやを確め、風呂敷包より數十本の眞鍮の煙管を出して「先生誠に申兼ねますが、どうか之れをバテレンの秘法で本金にして下さい」と願ひ出でた。翁も之には大に驚いて、自分は手品師ではないと斷つたとのことである。又或夜に一人の男が來て「先生某處の金持の土藏は錠前が固くつて、どうしても破る事が出來ぬから、貴下の切支丹の魔法で白晝でも人に見付らぬ樣に、窓からはいる法を敎へて下さい、決して誰にも話も傳授もしませんから」と懇願して何と云つても聞かなかつた。翁は懇ろに其不心得を諭して、我が來れるは義しき道を宣めんためであると敎へて歸したさうである。嗚呼其蒙昧不靈、實に思ひ半ばに過ぎるものが

あるではないか。

「我國に於ける最初の會堂は西紀千八百六十年頃（我萬延元年）長崎に居住する外國人等が一會堂を建設したのがそれである。其牧師はウイリアムス監督であつた。さうして屢々云へる如く日本人への傳道は事實の上に於て殆んど不可能であつたから、翁が日本に來られてから七年間、即ち千八百六十五年までは只一人の受洗者をも見るに至らなかつた。然るに明けて千八百六十六年、我慶應二年の春二月に肥後の人庄村六郎なる者が、ウイリアムス翁から初めて洗禮を領せられたのであつた。最も日本人最初の受洗者としては是より先き千八百六十四年我元治元年十月横濱在留のゼームス・バラ氏が其日本語教師なる矢野元隆氏に洗禮を授けられた。又翁が授けた庄村氏に次いでは慶應二年五月廿日に同地でフルベッキ氏より、佐賀藩の家老であつた村田若狹と云ふ人が受洗せられた。是等三人は我國に於ける基督信徒の魁で、實に萬難を排して己が所信を貫いた信仰の勇士として日本基督教史の最初の

一頁を飾るべき人々である。」

一〇　傳　道

傳道（二）

聖公會の大根據地たる大阪傳道の如きも、其初めは實に困難を極めたものであつた。翁が長崎を辭して大阪に來られしは明治二年（即ち千八百六十九年米國より歸任後）であつたが、講義所を開かうと思つても、耶蘇宗と聞いては驚愕して斷はられて仕舞ふ。何處に行つても其通りであつた。流石の翁も大に當惑せられて、遂に大阪府廳に出頭し「私は米國宣教師ウイリアムスと申す者ですが、當地に一の說教所を設けんと日夜奔走いたし、遇々適當な家屋を見出しても邪宗門と云つて相手にしてくれませんので困ります。」とて其助力を求めた。其時山本景武と云ふ人が翁に面接したのであつたが、太く翁の敬虔な人格に打たれ、深き同情を表して、氏自身に彼是と斡旋せられ、やつとの事で西區與力町の邊に家を借り、茲に初

めて一講義所を開くに至つたのである。是れが大阪に於ける基督教傳道所の嚆矢で、夫れが一轉再轉して今日の川口教會となつたのである。因に此の山本と云ふ人は、これが縁で基督教を研究し、其後遂に新島襄氏から受洗せられて組合教會の信者となられた。

此時分の事で最も興味あるは其頃翁によりて受洗したる人々である。其頃ウイリアムス翁を輔けて働いた人にエ・アール・モリス（明治四年三月二日渡來）と云ふ宣教師があつた。共に傳道の傍ら數名の少年に英語を教へてをつた。次に明治五年十二月三十一日にヂー・ビー・ミラー氏夫妻其他二名來朝せられたが、此時ウイリアムス翁の英學塾は非常に新日本の進取的青年の歡迎する所となり、ウイリアム學校と云つて評判よく忽ち數十名の生徒となつたので、明治五年の末には愈々一の學校組織となし、モリス氏ミラー夫人等其教鞭をとられた。翁は頭腦極めて明晰の人で、理化學數學の素養甚だ深き人であつたから、英語の外に是等の學問をも教へた。其頃

の事であるから、却々社會に重んぜられたものと見えて、之を卒業すれば大學南校（東京帝國大學の前身）に無試驗で入れたとの事である。其校に學んだ生徒で明治六年頃にウイリアムス翁から洗禮を受けた人々の名簿が、或人の處に保存されて居るが、左の如くに興味あるものである。

山下雄太郎、三崎龜之助、末延道成、吉川巖、田所貢、林包明、井上勝之助、加藤彰廉、平井重則。

而して其の翌年明治七年には監督は東京在留となり、從つて其學校も東京に移るやうな譯になつた。築地の聖保羅學院とは即ちそれで、今の立教大學の前身をなすものである。此校でも七八年頃に數名の受洗者を出したが、其中には岩下清周、龜田周次、長田貞吉、高橋正信、和田秀豊、鈴木壽一氏等の名前がある。此等は今日政治家外交官、教育家實業家、醫師等何れも社會の上流名士ならざるはない。何と隔世の感がするではないか。尤も中には故人となりし者もある、聞けば岩下氏の

如きは翁の訃を耳にして、奬學金等翁の紀念的事業の計畫あらば、應分の寄附をしたいと申込ださうであるが、曾て或雜誌記者に「予は無宗教、無信仰なり」と語つた清周氏も、老監督の聖德には感心せられて居ると見える。翁を思ふ時には彼も嘗て東京九段坂邊で傳道說教に熱辯を揮つた紅顏寧馨の青年時代を偲ぶであらう。茲に於てか氏も亦決して無宗教無信仰ではない。其他彼等の中には或は築地に、又は烏丸に屢々其居を訪ねて、聖者の面影に接するを嬉しんで居つた者も少からずと云ふことである。

一一 傳道

傳道(三)

翁は獨立獨行決して人の助けを受くるを好まなかつたが、それは傳道上にも遺憾なく現はれてをつた。彼は決して人の世話にならなかつた。例令ば傳道地を巡回せらるゝ時に信者が停車場に出迎へて「其鞄を持ちましよう」と何程云

つても決して持たせなかつた。そして俥にも乘らずにどんな手荷物でも自分で提げてサツサと歩かれた。其の歩行の早い事と云つたら有名なものであつた。地方に巡回せられても、他人に世話をかけるのが嫌ひであつたから會堂の片隅に宿泊して、成る可く信徒の宅には泊まられなかつた。而して其爲めに翁は各地の講義所や會堂に各一枚の煎餅蒲團を備へつけて居られた。田舍の會堂などゝ來たら實にみじめなもので、隨分雨露をも凌ぎ兼ねるのに、翁は雪霜ふかき冬の夜寒も一人火氣なき堂にまどろみ蚤や蚊やが、好敵推參と襲ひ來る夏の夜も、彼等のなすに任かせて、短き夢を結ばれるのが常であつた。偶々信徒の家に泊めて貰ふ時にも、信者達は監督樣のお宿をすると云ふ次第なれば、頗る光榮として何かと待遇さんとするのに、翁は先づ家に入るや、玄關の隅に家人の邪魔にならぬ樣に座をしめて、何と云つても聞入れ給はず「私こゝが一番よろしい、廣い室嫌ひです」と、いつかな動かれなかつた。そして信徒の家からの饗應も決して受けられず、白湯を貰つて御持參のパ

ン辨當を平げられるのが常であつた。實に極端のやうではあるが之れが翁の主義である。決して甲の家に受けて乙の家にて斷らるゝのでもなければ、或時は受けて或時は辭せられるのでもない。パウロの所謂爾曹愛を負ふの外何物をも人に負ふことなかれとは、實に我等これを初めてウイリアムス翁に見るのである。又訪問の時でも茶よ菓子よとマルタのやうに待遇さるゝのを非常に嫌つて、私信仰の事をお話に來たのであるからと固く斷られるので、信者は監督さんのお出とあれば、澁茶一杯も出さずにお話を謹聽する事にしてをつた。「是等は凡て時も金も神樣のために使ふべきもので、我々同志が自分のために勝手に用ゐるものではないと云ふ所から來てをるのである。

是れは今奈良に居らるゝ袋井牧師の話であるが、氏が嘗て翁の受持ちなる舞鶴に傳道せる際、翁の出張日と定まつた日であつたが、非常な暴風雨であつたので、ヨモヤ今日は御越しになるまいと話してをると、噂すれば影とやら、玄關に「御免な

されと監督のお聲がした。喫驚しながら出迎へると驚くまい事か、其顏は血痕淋漓として傷口よりはまだ鮮血が滲み出つゝある。「マア奈何なさいました。早速醫師を迎へましよう」と申しますると、「ナニ一寸怪我をしました少しも痛くも何共ありませんやがてなほりましよう」と何程すゝめても平氣で居られた。聞けば途中で風のため俥が覆りかへりて氣絕し、眞暗ではあるし何が何やらさつぱり分らず、之久してやつと蘇生して一人で辿りついたとの事であつた。是等も常人の摸し難い所である。又明治廿九年の夏であつた。或日曜日に琵琶湖上で全國學生端艇競漕會が催された事がある。其頃大津敎會は翁の傳道地であつたが、恰度其日は定期聖餐日であつたので、翁は東京よりの歸途土曜日に立寄られた。信者等は家には見物のための來客も多く、且つ自分等も見たいから聖餐は早朝に執行して貰ふことに定めてをつたで、傳道師が其趣を話すと、翁は以ての外と云ひ顏に、神樣の儀式を遊樂のために變更する事は出來ませぬから、平生の通り出席する樣勸めなされと云はれ

御自分も長途の汽車より今下りたばかりの其足で一休みもせずに、會員の宅を一々訪問せられ、其不心得を諄々と訓へられ、日暮定の宿に歸れば、室がないとて下女部室をあてがわれて、不平も云はず夜半まで明朝の聖餐の用意に餘念なかつたとの事である。其熱信誠忠思ふべしではないか。つとめ勵みて主の業をなすこれ我が糧なりてふ主の聖詞を眞に我物としないでは迚も斯くある事は出來ないと思ふ。

一二　傳道

傳道(四)　今の川口教會員なる並河氏が福井に居らるる時であつた。其時聖会會は未だ此地に手を着けて居なかつたので、或時傳道開始の目的にて、翁が其視察に來られたことがあつた。ところが其翌朝は敦賀に集會をなさねばならなかつたので、午後三時頃着福されたのに其日の中に歸途に就かれねばならなかつた。並河氏は如何に何んでも三十二萬石の城下ですから、三時間や五時間に視察することは出

來ません、どうか今一日お滯在下さつて充分御視察下さいと懇請した。翁はいや集會を休む事は出來んから、夫れでは何處か市中を一眸に見る高所は有ませんかと申されますので、足羽山と云ふ山に上れば全市は眼下にみえますると答へますと、夫れ宜しいソコに登りましようと言下に出發いたし、そぼ降る雨に隨分急な阪路を御老體の杖もなくサツサとお登山になりて少しも疲れし氣色もなかつた。並河氏は懷中より地圖を出し、實際と照合して一々説明し、種々の質問に答へられたが、翁はよし〳〵と頷かれて山を下り歸途につかれたと云ふことである。然して其後監督は此地に傳道を開始せられたのが即ち今の福井教會である、是はウイリアムス式とでも云はうか、實に奇拔な視察で、昔の軍學でも聞く樣な思ひがする。斯樣事は翁の傳道的生涯を通して實に數ふるに遑あらずであるが、餘りながくなるから誌さないことゝする。

翁は經綸の士ではなかつた。左れば傳道上の事でも百年の大計を樹てゝ畫策縱

横と云ふ底の事は翁に望むべく少しく無理であつた。彼は諤々論議の人でない、何處までも諄々訓敎の人である。心より心に、胸より胸に神を傳へねばやまぬ人であつた。炎熱の日も嚴冬の夜も信者を訪問し求道者を慰問せぬ日とては決してなかつた。故に其傳道も所謂個人傳道で訪問主義であつた。さうして翁に薫陶を受けた日本人敎役者には訪問傳道の努むべきことを極力敎訓せられ牧會の秘訣は一にも二にも訪問にある事を說かれた。訪問傳道を重んずるの風は實に翁が日本聖公會に遺された好個の紀念である。ウイリアムス翁を思ふものは何人も翁に訪問せられて、其の慈眼愛膓より溢れ出づる言葉を忘れることは出來まい。

翁が其信徒を養成するには實に非常な苦心をせられたものである。所謂彼の「我爾曹のうちに基督の容成るまでは再び產みの苦しみをなす」てふ聖言の通りであつた。先づそこに一人の求道者が洗禮を志願するとすれば、夫れに向つて洗禮の志願式を行ふ。次に數月の間準備をさせて使徒信經の試驗をやる。又暫の間準備をさせて十誡の試問をやる。其次には又準備をさせてをいて敎會史の問答をやる。祈禱書の問答をやる。首尾よく是等の試驗に合格して而して後洗禮を領するに至るので、如何に早くとも半歲より一年、おそきは二年も三年も費したとの事である。是等の試驗には、翁が著された使徒信經問答とか十誡問答とか、敎會問答とか云ふ書籍によられるのであつたから、志願者は勢ひ之れを記憶し、暗誦せねばならぬ。左れば受驗者の苦心は決して一通りや二通りではなかつた。で、中には信仰さへあればコンな事はさう八ケましく云はなくとも、段々研究したらよささうなものだと、不平を云つた者もあつたが、翁は頑として聽入れ給はず、青年であらうが、年寄りであらうが、同じ寸法で嚴正に之を實行せられ、情實とか都合とかで決して其方針をかへるなどと云ふことはなかつた。而して「皆樣は私に答へると思ふから間違ひです未信者に質問を受けたと思ひなされ、未信者が基督敎に就て質ねられし時には一生懸命で彼等がよく解るやうに十分に敎へてやらねばならないでしよう。夫れを思つ

たら決して等閑には出來ません。私未信者と思つて一生懸命に敎て下され」と云はれるのであつた。是ほど苦心して作り上げた信者であるから彼等は實に立派なもので一度翁に洗禮を受けたものは、信仰に倦みて敎會にそむくと云ふ人はなかつたさうで、苦しみの多かりし代りに恩寵のいやが上にも深きを感謝したとの事である。

一三　傳道

傳道(五)

ウイリアムス翁の誠忠勤勉なことは我等實に他に其比儔を見ない。彼は春夏秋冬五十年眞に一日の如く、朝は六時に起き、夜は十二時に寢られたが、この一日十八時間と云ふものを、悉く主の御業のために靖献した。さうして在邦五十年の間、四度の歸國を除いては、殆んど一度も避暑休養などしたことなく、天國を此國に打ちたつべく、唯働きに働き給ふた。天の父は今に至るまで働き給ふ。吾等も亦はたらく也との主の聖言は、翁にして初めて之を口にすべきものであると思

ふ。之を二月も三月も避暑だとか何とか云つて、輕井澤や箕根邊に集る今時の宣敎師に比して何たる相違であらう。

試みに翁が日曜日の日課を見るに、東京に居らるゝ時の如きは、早朝は築地の三一大會堂（建設以前は立敎學院講堂）にて禮拜と說敎を受け持たれ、夫れより深川眞光敎會に向かつて急がれた。築地より新大橋まではやがて一里もあるが、夫れを俥にも乘らずトットと驅けるやうに步かれたものだ。さうして十一時から禮拜說敎をせられ、更に二時から同所で傳道的集會を營み、夫れより淺草約翰敎會と、神田基督敎會とに廻り、晩禱と說敎とを務められ、築地に歸られるのであつたが、歸つて床に就かれるのは大抵十二時過ぎであつたとの話である。翁の東京在留は明治七年より同二十二年迄十六年間であるが、聞くところに依れば其間、斯くも多忙な聖日を唯だ一度も俥に乘られしことなく、鑠金の盛夏も朔風の嚴冬も雨の旦も雪の夜も膝栗毛に鞭打ち給ふたと云ふことである。翁曾て或土曜日に横濱に行かれた、所

が生憎も終列車に乗り遅れたので、其夜々通しに東京に歸られたさうであるが、これは其翌朝の早禱を氣遣れた爲めであつた。翁とても元非常な健康者ではなかつたが、其熱誠忠實は神の嘉納する所となつて、體力の上にまで偉大なる恩寵を賜はつたのである。先づ神の國と其義とを求めよさらば是等のものは皆與へらるべし。翁は實に其活る證者であらう。

櫻花は吾國が萬世一系の皇統を戴く矜と共に、日本國の精華として世界に誇るべきものの一である。吉野、墨田の滿開の花を見る者は何人も其爛熳の美に打たれざるを得まい。況や外國人をや。彼等はこの莊美に醉はん爲めに時と金とを惜しまず東西の名所を探るのである。然るに我ウイリアムス翁は日本にある間唯一度も花見に行かれた事はない。東京在留十六年京都二十年、其間未だ曾て杖を墨堤の花下に曳し事なく花を嵐山の流に賞したことはない。然も翁は春花秋菊、四季折々の自然の美を賞することを忘れ給はず、机上には常に一輪の草花を挿された。さうして

人が「監督さん今日は向島に花見に參りましよう、一度は御覽なさるのもいゝでしよう」と誘へば、机上の櫻花を指して「私毎日花見してゐます、上野向島これ澤山ある丈けです」と笑はれた。其風懷察すべきである。

一四　傳　道

傳道(六)　ウイリアムス翁の最後の傳道は、明治四十一年三月の岸和田行であつた。これは日本を辭せらるゝ約一ケ月前の事であるが、此の巡回傳道がウイリアムス翁が歸國の決心を促した近因となつたので、予はこの事を思ふごとに一種悲哀の涙に咽ばざるを得ない。其話はかうである。

去ぬる三年前の春、世人は桃よ櫻よと醉心地なる時節に、七十九歳の老翁は春秋茲に五十、相も渝らず傳道てふ唯此一事を努めて又他あるを知らない。此日も（三月廿七日土曜日）定例の如く己が傳道地なる泉州岸和田を應援せらるべく、京都を

出發せられた。所が遊山行樂又は參詣連の無遠慮は左らぬだに老衰せる體を疲勞せしめたであらう。翁は梅田驛下車の際劇しく顚倒せられ、人事不省に陷られた。さうして驛員に助けられて休息の後、人力にて難波驛に向はれたのである。然るに此處にて涙の物語を貽された。夫れは愈々窓口に倚り切符を買はんとして、己が行先を忘れられたことだ。嗚呼我國のために身命を献げられし老偉人は遂に老耄してこに至られたのである。誰れか之を聞いて暗涙に咽ばぬものがあらう。南海鐵道會社の大塚惟明氏は聳て驛員に内諭して、老監督が乘られた時は充分注意して、怪我過失のない樣にしてあつたので、出札係員は翁と知るや、難波驛より順次に全線の驛名を申上げ其記憶を喚び起しめんとしたが驛員の心盡しも水泡であつた。双方とも殆んど當惑して顏を見合せる外はなかつた。ア、翁の胸中や如何であつたらう察しまつるだに涙の種である。斯る所に敎會員なる一人の青年が來て「ヤーア監督樣、岸和田に行しやいますか、私お伴致しましよう」と挨拶した。そこで漸く此青

年と列車長とに助けられて岸和田に着せられたとの事である。其時も岸和田敎會の牧師は現任の菅寅吉氏であつたが、翁は菅牧師に向ひて、ありし次第を物語られ、偖て曰はるゝやう、「菅よ、余は再び岸和田に來ること能はず、余のためにはアトホームの思ひある此地も今日限り也」と非常に落膽失望の色を眉宇に現はし給ふた。斯くして我國最初の宣敎師なるウイリアムス翁の傳道的生涯は其終局を告げたのである。此事ありて以後、翁の日本の土となるてふ決心は一變して歸國となつた。即ち用もなき身を日本に横へて、徒らに諸人の世話にならんよりは、寧ろ故國にかへつて親戚の者に倚るこそ今の我身のとるべき道であると思はれたからである。

然り、彼の生涯は一面如斯く淡々如たるものであつた。彼の同勞者たるフルベッキ、ヘボン兩氏の如きは或は英和辭典を出すとか、或は政府の顧問となりて敎科書編纂に從事するとか、社會の事にも携はつて政府の表彰も受け、從つて世人も其功績を認めたが、ウイリアムス翁は鋤に手をつけて左右を顧みざる勤勉なる農夫の如

く、全精力を傾盡して牧會傳道に努められた。夫れも先きにも云ふが如く經綸百年畫策縱横なる二十世紀式の傳道家ではない。高德敬虔人を自からにして化育する古聖徒的傳道者である。左れば其長き傳道の生涯は一見何等の奇拔もなく、又何等の演劇的なるものもない。然も五十年一日の如く靜かに、さうして熱く燃え續きたる信仰の火と、滾々として晝夜をわかたざる潔き愛の泉と、白髮銀髯房々として溫雅敬虔の容姿の中に、凜然として雲表雪山を望む如き希望の光とは、今も後も彼に敎へられ、彼に接せし多く人の心中に深く深く印象せられて、陰に陽に神國建設の材料として用ひらるゝであらう。是に於て賢明なる經綸、赫々たる事業と何れか、唯神ぞ知しめす。吾等其輕重を問ふべきでない。

一五　翁の說敎

翁の說敎（一）

予は說敎家としてのウイリアムス翁を記して見たい。翁が渡來せら

れたのは三十歲の時で、進取敢行、倒れて後ち已む底の血氣の靑年時代であつたから日本語の研究の如きも實に飢ゑたる者の食を喰むが如く盛に研究せられた。京都の山邊氏は翁が燒き棄てよと命ぜられたる帳簿書類の中より密かに翁の手記せる日記を拔き取り保存せられ居る由なるが、其中に千八百六十年より六十一年頃即ち渡來後一二年の日記ありて、中には片假名を以て書體も立派に、コトタレバ、タルニマカセテタラヌモノ、タラデコトタルミコソヤスケレだとか、タイコウサマノ、センナリピョウタンだとか、或は又たツツシメヨ、ホタルホドナルワヅカノヒ、ココロユルスナ、ハヤカネノコエだとかヲカメハチモク等の和歌俗言などを書き記し、其他切支丹禁制の寫しなどを記してあるさうだが、之は多分說敎の材料とされたものであらう。不自由な敎師につきながら僅かの間に、斯くも深く研究せられた其熱心思ふべしである。併し翁は我國最初の宣敎師として殆んど其全生涯を我國に過されたの割には日本語は決して巧妙とは云へなかつた。どちらかと云へば寧ろ拙い方で

あつた。さうして言葉の種類も舊式な日本語で上海なども上海と云はれた。其他い、かでとかされば、とか云ふやうな文章語を其ま、用ひられたものだ。これは序に記してをくが、安政六年に彼のタウンセント・ハリスが使節として來朝し、陛下に謁見を賜ふた時の通辯役はウイリアムス翁であつたさうであるが、翁はまだ陛下と云ふ語を知らないために「アナタサマ」と申し上げたので、後で不敬語でなかつたかと非常に心配せられたさうである。

斯く拙劣なる日本語なりしに拘らず、翁の說敎は實に偉いものがあつた。其銀線を束ねた樣な澤のある白髯をゆるがしつゝ、說敎臺に立ち給ふて溫順敬虔な態度で熱誠の充ち〳〵たさうして心持ち顫へた語調で案を打て神の恩惠、主の愛を說かる時は何人も思はず知らず襟を正し首を垂れ、彼と共に熱信に燃え彼と共に感謝の念に溢れ彼と共に恩愛の涙に咽ばざるを得なかつた。其時は語句のまづい事も訥辯なことも念頭にない、唯だ敬虔の情と感恩の念とが一堂の內にゆらぐを覺ゆるのみ

であつた。何もの、おはしますかは知らねども辱なさに涙こぼる、とは實に翁の說敎を聞くもの、感想であつた。曾て東京三大會堂で一人の老媼が會堂に入つて來て翁の說敎を聽聞して居ながら、密かに其神々しき風姿を合掌して拜みつゝあつたと云ふ事であるが、未信者にして翁の一回の說敎に打たれて求道心を起したものは決して少くないとの事である。又或時の如きは同會堂で「十字架上の基督」を說かれたが會衆が餘りに感動して嗚咽涕泣、如何にしても說敎を續くる事が出來なかつた。其日の深川眞光敎會のも同樣であつたとの事である。如斯は翁にとりては珍しい事ではなかつた。是に於てか說敎は雄辯でもなければ、語調、修辭の美しいのでもない、實に主イエス、キリストと彼の恩惠に充ち溢れたる信仰を以て、熱心に唯一の神を說くにあるのである。

一六　翁の說敎

翁の戒敎(二)

翁は慶應二年に江戸監督の職を本國傳道會社から授かつたのであつたが、夫れ以來我國に在る間已むなく一二度西洋人の獻身禮で奬勵せられし事の外一度も英語で說敎せられたことがなかつた。是れは翁の主義で、自分は日本傳道のために遣されたものであるから、日本人の外には說敎せぬと云ふのであつた。而して說敎其ものも聖書一天張で、神の恩惠と主イエス、キリストの救ひを說くの外は普通の演說的な說敎をせられた事はなかつた。これ即ち使徒パウロが、我れイエスキリストと彼の十字架に釘けられしことの外は、爾曹の中にありて何をも語るまじと意を定めたれば也と誓つた心事が翁の衷に燃えて、人々の信仰をして人の智慧によらず、神の能に賴らしめんと欲はれたのに外ならないのである。一面から見れば誠に融通の利かぬ樣であるが、之れこそ翁の翁たる所で、其說敎に力あり權威あり、敬虔の情趣にあふれ、愛の熱泉滾々として聖感靈動雲のごとく、時に襟を正して戰慄し、時に壇を仰いで涙を揮ひ、會衆をして思はず、オ、主よアバ父よと叫ば

しめたる所以であらう。

ウイリアムス翁は說敎の準備をされる時は一室に閉ぢ籠つて內錠を下ろし、如何なる來客にも面會されず、强ひて扉を叩けば、中より半身を表はして面會を謝絕せられるのが常であつた。而して其草稿は例の客な手帳に事細かに記載し、毎週二回の說敎を決して缺かさず準備された。然して最も驚畏すべきことは、例令ば既に今週の說敎が準備されてあるのに、突然他より遠來の敎師などありて其人に敎壇を讓つた場合とか或は巡回其他の都合で其準備せし說敎が不用となりし時には、それを次週に使はず其まゝ筐底に葬つて、更に次週は新しく準備せられたと云ふ事である。是れは久しく翁に隨從せし一敎師の話であるが、或年の夏、翁の說敎草稿を整理した事ありしが、其中には右の樣な運命を蒙つて葬られた草稿が幾十篇となくあつたとの事である。因に使用せし草稿には其年月日を記入してをられた。青年說敎者は猛省一番、翁の勤勉と覺悟とを學びたいものである。

翁が他人の説教を謹聽せしことも記すに足ることゝ思ふ。彼は會堂の隅の方に坐をしめて如何なる黄嘴輩の説教も熱心に謹聽せられた。殊に輓年七八年は毎日曜夜京都約翰會堂に出席禮拜せられ、自身に司會などをして若き牧師の説教を聞かれたが、其の敬虔熱心な態度は寧ろ崇高いと云ふ外はなかつた。偶々牧師が「監督さん、誠につまらぬ説教で御迷惑で御座いましよう」と云へば「いや誰の話でも注意すれば其中には必ず神の御聲が聽かれるものです」と申された。彼の英國ライダル・チャーチに出席して名もなき牧師の説教を靜聽したオーヅォルスや、ドクトル・アーノルドの事なども偲ばれて奥幽しさ限りない。

翁の最後の説教は歸國せらるゝ前日（四月廿六日）の日曜で朝の禮拜説教がすんだ後の一場の奬勵であつた。監督は牧師が壇を下るや否や「わたくしいちごん」と云つてよろめく足をふみしめて登壇し、教臺を叩て非常なる熱誠を揮つて一大アッピールをせられたが、會衆は勿論監督の一言一句をも聞き漏さじと前に進み耳を聳

てた。其勸辭の一節はかうである。『今日信者大變少ない、いかで教會に來ません。會衆少ない教師失望します、説教力ありません。貴君方、ひとーりがひとり連て來ます宜しい。さすればひとりふたり、ふたり四人、四人八人、さうして此會堂一杯滿ちましよう。教師勵みます、キリスト喜びます、聖ヨハネ天に於てよろこびます……』。これが老監督が日本に於ける最後の聲であつた。同時にこれは翁が日本全體の基督教會に向つて貽された警鐘の聲ではあるまいか。

一七　翁の祈禱

翁の祈禱

翁の祈禱が説教以上に靈氣に溢れ、力に滿ちてをつた事は云ふまでもない。されば假令其の説教は忘れてしまつても、彼の靈氣汪溢せる祈禱の聲は生涯忘れることは出來ぬとは、翁に接した人々の何人も口にする所ろである。他の祈禱に就れ云々するのは敬虔の念がないと云ふ人もあるかもしれんが、予は少しく翁の

祈禱に就いての逸事を語りたい。

聖公會の祈禱はかの祈禱書と云ふものに依りてするので、是れが飜譯は翁が卒先してやられたものである。されば翁は實に嚴格な、さうして忠實な祈禱書の愛用者であつて、翁は何時も「祈禱書を其の儘に使つて居るなら議論も混雜もない、のみならず自他の利益である。夫れを自分の好みによつて加除するのは宜しくない事です」と敎へらるゝのが常であつた。

此の祈禱書を使用するのを聞くに、我等には、聖書の朗讀でも聞くやうで、どうも祈禱と云ふ境地に入らぬ樣な、今一息と思はるゝところがある。是は恐らく聖公會以外の人の一樣に感ずる所であらう。然るに聞く所によれば翁が嚴肅な莊嚴な敬虔な、さうして力に滿ちた聲で祈られるときは迚も之れを祈禱書によりて祈らるゝとは思はれず、若し神と親しく物語るてふ祈禱ありとせば、是こそ確にそれであると思はざるを得なかつたと云ふことである。然して愈よ其祈禱が高潮して來ると、

其聲は顫へて一言一句、會衆の胸底に波打ち心の琴線に觸れて、眞に主降り給ふを感ぜしめ、思はず感涙を催さざるを得なかつたさうである。

祈禱書に就ては面白い逸話がある。曾て奥野昌綱翁が老監督を訪問せられて、談遇ま聖公會の祈禱書のことに及んだ。熱心な奥野翁のことであるから、ウイリアムス翁に向つて、祈禱書によりて祈禱する事の如何にも形式的にして誠實を缺くことを批難せられた。監督も亦主義信仰の上には一歩も人に讓る方ではなかつたから、滔々として其然らざる所以を答辯せられたが、所謂水掛論で、双方とも固く取つて動かなかつた。之久して監督は「奥野さんお祈しましよう」と云つて椅子をはなれ、脆づいて例の謙遜な態度と、敬虔な語調とを以て、祈禱を捧げられた。續いて奥野翁も熱涙に咽びつゝ一場の祈禱をせられたが、後で申さるゝには「ウイリアムスさん、只今貴下のお祈には實に感じました。私今日まで、こんな靈的なお祈をきいた事はありません。本當に神樣にお目にかゝる心地がいたします」と、したゝか感謝

せられた。監督は只一言「奥野さんこれが貴下のお嫌な祈禱書の祈で御座います」と。奥野翁は益々感歎して歸宅せられたが、同翁が常に聖書と共に一冊の祈禱書を携帶せられ、時には祈禱書を用ひて祈禱をせらるゝに至つたのは此事ありて以後のことであると云ふ話である。

翁或時數名の教會員と共に祈られた。其時信徒等の祈りの後、翁も一場の祈をせられたが、默禱終るや、色をなし、衷心より出づる懺悔の聲を以て「私只今罪を犯しました。お祈りしながら他事を考へました」と告白せられた。吁々彼の祈らるゝや、實に天上天下神と我の外何物もなき、絶對無二の境に之かれたのである。併し此時は圖らずも餘事を思はれた爲めに、斯くも會員の前をも恥ぢず戰慄せられたのであらう。我等は祈禱中、眞に他事を思はざるか、嚴密に吟味して翁に學ぶところ有りたいものである。

まことに祈禱は翁の生命であつた。以上は表面であるが彼は密室に於ても閑さへ

あれば必ず禱つて居られた。さうして毎日正十二時には何時如何なる所に居るとも、時針の音と共に必ず傳道のための祈禱をせられた。又何事をか計畫し或は實行し着手せんとする前には、必ず一人密室に靜座默禱して其可否或は方法につきて、神の叡智を伺ひ祐助を祈るのが習慣であつた。翁が日本を去られんとする時或一二の人が夫れとなく惜別の情を洩しますと、翁は「祈る心と心には距離はない、何處に居るも神樣と吾々との間は同じである」と云はれたさうであるが、歸省後は通信ごとに「我が毎日の日課は日本聖公會のために祈ることなり」と記され、臨終には囈言のやうに日本語の祈りをせられて、傍人を驚かされたさうである。嗚呼翁の一生は實に祈禱の生涯であつた。

寛容

聖書に「爾曹神に選ばれて聖潔かつ愛せらるゝ者となりたれば、慈悲矜恤

一八　寛　容

謙遜、柔和忍耐を衣よ、なんぢら互に容忍をなし、若し人に責むべき事あらば之を恕せ。キリスト爾曹を恕し給ひしが如く爾曹も然かすべし」と云ふ句があるが、ウイリアムス翁は實にこの實行者であつた。即ち常に慈悲矜恤謙遜柔和忍耐を着たる人であつた。凡て基督の恕し給ひしが如く人の過罪を恕し、忍容をなす點に於て他に其の比を見ざる人であつた。柔和とか、忍耐とか云ふことは、云ふはやすくして行ふは難い事であるが、翁に於ては之れが玲瓏たる性格の中に溶けて、渾然として云ふに云はれぬものがあつた。されば怒るべきに怒らず、激すべきに激せず、耐ふるべからざるに耐へ容るゝ可らざるを容るゝは實に之れ眞情よりする自然の流露にして、其間毫も克己的作爲の跡を認めず、何事も莞爾として胸中常に春光の漲るが如きものがあつた。パウロの所謂患難にも喜びをなすで、翁は如何なる時にも悲哀せられた事はなかつた。然り感謝と喜悅とは翁の生活の全體を云ひ現はす最も適當な言葉であらう。であるから如何に失禮なことをせられても、罵詈讒謗を浴びせ

られても、莞爾として柳に風と受け流された。これ謂ふ所の微笑主義で何人も翁の腹立れた顏容を見たことはないと云ふことである。

翁が東京築地に居らるゝ時の事であつた。何か傳道上の計畫に就て協議會が開かれた時、翁の意見と他の人達との意見が非常に懸絕て、痛く激論に及んだ事があつた。双方とも堅くとつて讓らない。翁の自信に忠實なるは有名なものであつたが、此時も何とかして翁の意見を飜させやうと反駁大に努めたが其効がない。多數の者は一老爺の言を動す能はず、遂に堪忍袋の緒が切れて口々に其の頑愚を罵つた。現皇太子殿下の侍醫なりし淺草教會の長田長老の如き「貴老は日本傳道の邪魔者です、お歸國なさい」とまで暴言せられた。監督は始終ニツコリとして、終りには默まりのまゝで、諸氏の顏を等分に見つめて、咳一つせられず、彼等の云ふにまかせ、罵しるに任せた。が然し、彼等の意見は立たなかつた。さうして翁の計畫が後日となれば善く且つ賢きものであつた。長田氏は後で熟々自己の暴罵を恥ぢて人をして

翁に罪を謝したが、翁は相も變らぬ微笑主義で「長田さんはお若いですね、私アンナ人好きです」と云れたのみであつた。

又或時の事である。立教學校で一生徒が二階の牕から庭に向つて唾を吐いた、所ろが何と云ふ運の惡いことであらう、其の穢い粘唾は人の頭上に落ちた、さうして其頭は人もあらうに老監督の半禿のそれであつた。翁は夫れを拭ひながら別に見上げやうともせず我室に入られた。其生徒は色をかへて驚いたが仕方がない。直樣監督の室に行つて陳謝するには、餘りの失態にして其處置を失ふた。學友は何か沙汰があるだらうから、夫れを機に自白せよと云ふた。所ろが其日も、其翌日も何事もなかつた。そこで彼は耐りかねて監督の室に行つて具さに先日の粗忽を謝した。翁は全く與り知らざる者の如く「運動場は人が通りますから、氣をつけなされよ」と唯だ一言であつた。少さい事ながら翁の人となりを偲ぶに餘りある事と思ふ。

更に興味ある逸話がある。現大阪川口教會の名出牧師が東京三一神學校に在學當時の頃であつた。翁は學生と共に寄宿舍の二階に寄寓せられ、其二室を一は應接と書齋とに、一は寢室にして居られた。其時名出氏は三階の北側にある丸窓の小暗き室で、入舍以來頗る不滿足に思つて居つたので、或日のこと翁の室を訪ひ、かう云ふ談判をした。曰く「我輩は神の爲に身命を捧げた前途多望な青年である。あんな不健康な室に居つては身體を害して仕舞ひます。監督さんどうぞ私に外に下宿することを許して下さい」監督は「さうか、考へておきましよう」と云つて其場はすんだが、翌日名出氏が外出して歸つて見ると小使は既に同氏の室を掃除し、監督の荷物を大半運び込んでをつた。氏は驚愕して、「どゝうしたんです」と訊ぬれば監督さんが此室に引越しになりましたとの事、名出氏は益々驚いて早速監督の室に行き、前の失言を謝し、監督さんどうぞ許容して下さい。貴老があんな處に入らつしやる位なら私共には猶更のことですどうぞ〳〵と、平身低頭して現狀維持を願ふたが、

監督は氏の肩を叩いて、莞爾として微笑み「名出さん、心配いりません、私夜十二時から朝六時迄、寝むだけです。私晝はをりません。寝む時光線入りません。暗い室大變よろしい。貴君等勉強するには光線空氣大變必要です」と何と詫びても聞入れられなかつた。而して其顏には心から我門下を愛する眞情が滿ち溢れてをつた。氏は已むなく監督の寢室を占領せられたが此事以來益々翁に心服し、監督のためとあれば、身命を賭しても奉仕したいとの決心を起したとは氏の直話である。

其他是等に類似する話しは數々あれども今は記さない。唯だ茲には其の一二を誌して翁が忍容仁慈、如何にしてキリストらしく七度を七十倍せよと、衷情より曰ひ得るの人となるべきか。其罪を惡んでも其人の靈に眞個の同情と愛とを注ぎ得べきかに就て、寢てもさめても心を碎かれしかを偲ぶよすがとしたいのである。

一九　意志の人

意志の人(一)

多くの人はウイリアムス翁を溫厚な謙遜な柔和な、從て一面には優柔な女性的な性格と想像せられるであらう。夫れは大なる間違である。成程翁は溫厚謙遜柔和の德を備へられてをつたが、一面には實に剛健にして勇爲敢行死も亦辭せざる武士の風格を持してをられた。而して自ら信じて是とする事は直情徑行寧ろ頑固不靈と云ふも敢て失當にもあらざる底の蠻氣を持つてをられた。然り彼は實に剛毅なる意志の人主義の人であつた。其點丈けは彼と共に働いた幾多の聖公會の牧師等をして「監督の頑固」には實に困ると幾度か嘆聲を洩さしめた。併し乍ら此オヤヂの頑固は彼れが幾日幾夜祈りによつて神に訊ね、聖旨のまに〳〵決心せられた所のもので、よく考ふれば何れもそれが最善の方法であつたから仕方がない。

ウイリアムス翁が如何に剛健なアングロサクソン魂、否な基督魂を持つてをられ

たかは彼が當年三十歳の青春多望の身を以て、全く無智識な異邦の傳道に献身せられた事でもわかる。之を今日南洋或はアフリカの蠻人傳道に比するに、尊王攘夷の日本に傳道するよりは、却つて無智蒙昧な野蠻人の方が易いであらう。彼れが支那傳道より轉じて我國に來られたのは、いかに聖旨とは云へ、豪宕不拔な男子にあらざれば能はざる所である。翁の長崎在留の頃の事である、當時海内の風雲急にして殺伐の氣は天下に充ち攘夷派の武士は三府五港に横行して、碧眼人と見れば之を誰可するも面倒と唐突斬りつけると云ふ風であつた。時の長崎奉行は太く之を憂ひ、斯る暴行を避くるため、長崎滯留の外人を出島に移居せしめた事がある。彼等は皆其好意を謝してそこに轉居したが獨りウイリアムス翁は何と云つても聽かれなかつた。是れ自分は主の福音を宣傳へんがために來たものであつて、我一身の安危のために神の命じ給ふ地を去る事を欲しなかつたからである。奉行も一度は他の厚意を無にするを怒つたが、其聖者の如き風丰と天職に忠なる決心とに接しては、又一言

もせられず默許されたと云ふとである。嗚呼己が天職使命のために迫害も劍も敢て畏れないとは實に偉とすべきではないか。生くるも主のため死ぬるも主のためとの信念を持つ者にあらずんば企及し難い所ろである。

こんな風であつたから彼等外國人は何時何處で浪士の太刀風を喰つて果敢き異境の露と消えるか分らなかつた。曾て監督が「私が長崎に居た頃には攘夷論の最も烈しい時であつたから、外國人は外出するには命懸であつた。夫れ故皆なピストルを携へてをつたものだ」と語られた事がある。其時或人が貴老もピストルを御携帶になりましたかと問ひますと、翁は容を正し、儼然として「私は神を畏れますが人を畏れません」と云はれた。信仰の勇者なる翁にしては固より左もありなんと思はれるであらうが、併し唯だ譯もなく斬捨て御免の武士の手に掛つて一命を捐るのは、異邦宣敎の開拓的大命を帶びた人としては殉敎の死と云ふよりは寧ろ犬死の樣に思はれる。況んや若し此場合にウイリアムス翁が殺されでもしたら、我國に於ける新

教傳道の萌芽は嫩のまゝに斷たれて仕舞うからである。(此時分ジョン、リギンス氏シーイー、ミイド氏何れも健康を害して歸國し、全くウイリアムス翁一人であつた然るに敢て之を携へられなかつたのは之れ實に乃も之を斷つ能はず水火も之を亡ぼす能はざる永生を信ずる堅忍不撓の信念と、神と其使はし給へる主イエスキリストの外何物をも畏れざる剛健不拔の意氣とに依るに外ならないと思ふ。予は更に一事を附記したい。夫の條約改正前までは外國人は居留地以外十里を出づる事は出來なかつた。併し之れは表面の規定で、實は病氣保養とか學術研究とか何とか理窟をつけて、皆それ〴〵欲する場所に出て歩いたものである。然るに翁は此禁制が解けなかつた以前は唯だ一回と雖も所定の地域より以外に出られたことはなかつた。他の宣教師連が何かに託事て地方傳道などを試みても、彼は頑として夫れに反對し、居留地又は夫れを中心とした十里以内の地に於て一心不亂に傳道せられた。迫害を畏れてでないのは前陳るが如し、然らば如何曰く「上にありて權を掌る者に凡ての

人々服ふべし。そは神より出ざる權なく、凡そある所の權は神の立て給ふ所なればなり。是故に權に悖ふ者は神の定めに逆くなり。有司は善行の畏れにあらず、惡行の畏れなり。爾曹權を畏ざることを欲ふか、さらば唯善を行へ」これである。是れは決して融通の利かぬ人でありしよと一笑に附すべきでない。鷹は死すとも穂を摘ずとか、愛國愛人の赤誠燃ゆるが如き翁には、日本天皇陛下の御制規をくゞつてまで傳道しやうとは如何にしても思はれなかつた。況んや旅行遊山をやである。條約改正までと云へば來朝以來約四十年の間である。此の長年月の間全然出來ぬ事なら兎も角、誰でも少しづゝやれば出來るのに、一回だも内地旅行を試みられなかつたとは實に驚かざるを得ない。これ意志の强固なる人でなければ到底始終一貫する能ざる事である。

名出牧師曰く「ウイリアムス監督は唯だ一回だけ内地旅行をせられた。夫れは明治十八九年の頃で、奥州の白川に行かれた事である。是れは純然たる學術研究のためであつた。即ち慧星が我國に

現はれて、同地が其觀測上最好地點であつたからである。翁は非常に理化學の素養のある方で、自然化學には深い興味を有つて居られた。此外には後にも前にもないと信ずる」云云。

二〇　意志の人

意志の人(二)

翁が意志の鞏固にして、一歩も自己の主義主張を枉げざりしを語る他の二三の逸話がある。或時の事であつた。聖公會では諸種の祈禱は彼の祈禱書によつてするのであるが、此外に自由祈禱會なるものがある。是が我等が普通に云ふところの祈禱會なのである。又た聖公會では禮拜堂は極めて嚴格な意味に於て聖別されしもので、禮拜、説教、聖餐禮洗禮の如き聖式の外は使はない事になつてをる。例令ば演説會、講演會、祈禱會、日曜學校等は禮拜所では決して開かぬのである。かう云ふ規定は若き日本の牧師等には頗る無意氣の區別と思れた。禮拜や説教が神と人との交通、神の榮の爲めなら祈禱會も宗教演説講演も乃至日曜學校も同樣

で、皆如何にして神國を地上に建つべきかとの我等の忠誠に外ならぬと解釋した。或時の事である、現神田教會の皆川晃雄氏と大阪の早川喜四郎氏とが祈禱會に就て「監督さん私共神樣と交通し感謝希願するのが、なぜ禮拜堂ではいけませんか」と詰問した。監督は理由は云はれない。唯いけませんいけませんの一天張で、逆まに此方の語をとつて、なぜ禮拜所以外の處ではいけませんかと云はれた。而して初めの間こそ討論も辯解もすれ、やがて固く拳を握り占めて、力强く前に振り下すと同時に「これが私の主義です」と一喝したが最後、口を緘んで一言も發せられず、彼等の論ずるに任せ攻擊するに任せた。これ人と議論する時の翁の習慣で、この「ザット、イズ、マイ、プリンシプル」が出た時は、最早討論終結を告げた時で、それ以後は眞に木偶に物言ふと同樣、云ふだけが損であつた。

是と同じ樣な事は日曜學校を會堂に開くの可否に就て神學生等と翁との衝突である。彼等は日曜學校は神樣のための事業であるとの主張を以て大に議論を戰はした

が、結局「ザット、イズ、マイ、プリンシプル」を浴せられて敗北した。是等の問題は今や曾に聖公會のみならず、他派の教會でも大に其缺陷なるを自覺して、日曜學校々舍の建築や、親睦會送別會などのための會館の建設などをなし、禮拜所は專ら心靈修養の場所とする傾向を生じて來た。數十年前から如何に不自由な會堂にでも無理に截然區劃をなして嚴乎と之を實行し、何人の反對にあふとも之を抂げられなかつた翁は偉いものである。

二一　意志の人

意志の人(三)

最後に猶一事を記して此項を結びたい、翁が福井に傳道せられつゝある時の事である、一人の婦人が受洗を願出でた。此婦は某牧師（當時傳道師）の姉君で、信仰の道も一通り辨へて居られ、翁も一度面接して大抵其人を諒解せられてをつた。或夏の事である、ミッション、スクールに行つて居る其人の娘も休暇で

歸省てをるし、信仰も進んで來たから、監督の今度の御出張には是非共受洗いたしたいと申出でた。主任者もそれを承認し、執事も賛成して老監督の來福を待つた。スルトやがて監督が來られたので主任の傳道師は、何某が斯樣々々の次第で是非共今回受洗したいと申しますから左樣取計ひましようと翁に圖ると監督は「夫れはいけません」と一言の下に刎ねつけた。主任者は「何故ですか、彼女は信仰もよいし、且つ事情が事情ですからどうぞ御承諾を下さいまし」と懇願したが、一向聽許られなかつた。やがて執事も出て來て「監督さん、是丈はどうぞ御承認下され、さう致しませんと彼女は躓きます。自分では洗禮を受けられるものと思つてゐますから、どうぞ特別の御詮議を以て御聽許下さい、其代り受洗の上は私共必ず養成に心を碎いて立派な信者に仕上げてお目にかけますから」と、夜半まで二人で口を酢くして懇請した。翁は「自分はこれ迄三度其人に會つて試驗をせねば授洗せぬ事にしてをる。それが私の主義である。本人に對しては誠に御氣の毒であるが、一人の

ために自分の年來の主義を抛げることは出來ぬ」と斷言せられた。翌れば日曜である。件の女は今日こそ新生の日と衣紋つくろい、いそ〳〵として出席した。其朝も更に執事と傳道師は今一度考へなほして下されと願つたが、元より其効ある筈なく之を聞いて失望の極、躓かんとせる彼女を嚼んでくゝめるやうに諭聞かせて、漸と其場をすませたと云ふことである。其執事とは今川口のバルナバ病院に居らるゝ並川幹房翁である。其婦は後で監督から受洗したさうであるが、其時彼女の失望と立腹とで、何と慰めても聞かなかつた時程困つた事はなかつたとは、同氏の一つばなしである。主義のためには斯かる特別なる事情をも犧牲として顧みぬ頑强なる意志の人は益々吾人の敬嘆を價するではあるまいか。「ザット、イズ、マイ、プリンシプル」。これ實に翁の半面を言ひ表して餘蘊なしである。

二二　高徳の人

高徳の人(一)

誌し來て茲に到り予は如何にしても我が筆穎の進まざるを覺ゆるものである。拙なき我筆は其分にあらざるを感ずるの念切なるものである。如何となれは是れ實にウイリアムス翁の眞個面目にして以上列記した種々の德行は皆其根源をここに發した枝葉末流たるに過ぎず。而して之を誌さんには予が文餘りに惡しく、詞餘りに粗笨なるが故である。併ながら之を誌さずして止みなんも心苦しく、且つ監督の傳記としては所謂佛作つて魂入れずてふ感があるから豫じめ其分にあらざるを謝し、偖て他派の人は愚か教外の人(未信者)までが其名を呼ばずして、老聖人、或は活佛と稱した翁の德風遺香を端的に記述して、後のウイリアムス傳者のために材料を提供するに止めたいと思ふ。

翁の愛憐謙遜至誠敬虔に滿ちた溫情が、彼に接する者を薫化せずしてはやまなつた事はこれまでにも少しく記した。以下記さんとする所は、左樣な具象的なものではない。實に翁夫れ自身より發する人格目然の發露である。吾等は福音書を讀む時

に、主イエス三年の御傳道中、到る處にて「善き師よ」とか「汝は活ける神の子キリストなり」とか讃歎の辭を受け給ふた事を見る。是れをウイリアムス翁に引用するは翁の斷じて容されざるところ且つ敬虔を缺ぐ事であらうが、讀者はクライストライキを己が理想とせる翁には慥に之に似通うた事態があるといふ事を記すことを許して貰ひたい。予は「翁の說敎」の項に、或一人の老媼が聖三一大會堂の禮拜に列なり敎壇に立てる翁の容姿を見上げて、合掌して之を拜んだといふことを記したが、之に類することは幾らもあるやうである。翁が東京在留の時である。今の川越敎會の田井牧師と共に埼玉地方を巡回せられた事がある。或日田井氏は別途にて寄居町で待ち合す事となつたので、同氏は先着して同地二三の信徒を伴ひ監督を出で迎へたが荒川の渡船場まで行つても、何處で行き違つたか見えられない。そこで渡守の爺に尋ねると「ハイ今方神樣のやうな御方がお渡りになりました」と答へたので急で町の方に引返したと云ふ話がある。又こんた事もある。是れは前章にも出た山邊氏

の秘藏さるゝ翁の日記中の事であるが、左に其全文を記載すれば「文久元年（西千八百六十一年）七月十日。此日一向宗に屬する一僧侶の來訪を受く、余は彼と、肉の慾に耽りて更に良心の制裁を顧みざる人々の行爲に關して論談し、余が、余を圍繞する人々の如き生涯を欲せざる理由を述べけるに、彼は、汝は正しき人なりと曰ひつゝ、恰も神を拜むが如くして予を合掌禮拜して已まざりき。予は固より神を禮拜すべきを敎へたり」云々。僧侶に道義の念少なきは今に初めぬ事なるが耶蘇敎と云へば蛇蝎の如く嫌ひ、不倶戴天の仇敵の如く思へる僧侶が、態々頭を低して其說を聞き之を伏し拜みて尊崇するに至つては、如何に翁の人格の高く品性の純の純なるものなりしかを知るに足るであらう。彼の新約聖書の飜譯が全部完成して其の感謝會が明治十三年四月十九日を以て、東京築地新榮敎會堂に開かれた時、多くの牧師宣敎師が列席せられ、翁も元老の一人として出席せられたのであつたが、其秀て淸く高き風丰は、恰も連山の上に擢でゝ雲表千古の雪を戴き、然も自からその

高を知らざる芙蓉峰の如く、何人も之を仰げば愈よ高く、之を望めば愈よ清きを感せざるを得なかつた。其席にありし篤信な老紳士が、『今日は偉い人格の高い方を見た。彼は群雀中の一鶴だ彼の品性があれば沈默してをつても雄辯なる説教である。基督教の説教は彼獨りで爲て居られた。今活ける人の中に基督に似た人を求めんとならば、彼は恐らく其人であらう』と感歎せられたと云ふことであるが、是は何人も同感であつたであらう。昔獨逸の或村にて眞に基督らしき一牧師ありて、人民は彼が途行くを見れば「見よそこに基督歩めり」と走り寄りて跪拜したと云ふが、我ウイリアムス翁も實に基督を理想とし目標として其の御足跡を歩みつゝ、遂に其理想の域にまで達せんとせられたのであるまいかと思はざるを得ない。

二三　高德の人

高德の人(二)

史記列傳に「君子容貌如愚、良賈深藏如虛」といふ句があ

るが、之に就て面白い話がある。かの近代の有名な漢學者なる岡鹿門翁が或日其塾生に此の個所を講義するに際し、生徒に左の樣なことを語られた。曰く「世の中に傑出した人物として其盛名を謳はれながら、其人に接して一見愚なるが如き境地に達し得ざる所を見るならば、其人は未だ君子と稱するに足らないものである。我壯年の頃切支丹邪宗門を素見し、大に之が攻擊をやらうと思つて、當時築地の耶蘇教學校に居りし、ウイリアムスと云ふ宣教師を訪ねた事がある。自分は此頃屢々西洋人と會つては威丈高になつて孔孟の教を説き、論談風發、大に破邪顯正の議論をやつたものである。夫れで今日こそは一つ大に彼を説破して、グウの音も出ない樣にしてやらうと思つて、傲然としてやつて行つた。然るに一度彼の高僧と對坐するや、彼の一見愚なるが如く、然も神々しき容姿に接し、其敬虔敦厚なる言辭を以て、「貴方樣、神樣を信じなさい。何もかも皆わかつて參ります」と云はれたのには、例の如く滔々と議論する事も出來ず、オメ〳〵と引退つた事があつた。これは

決して彼れが雄辯滔々人を煙に卷いた爲でもなければ、論理整然として人を說伏したのでもない。彼は寧ろ恭儉寡默自から畏るゝが如く見えた。これ畢竟其人物の力にして、高德典雅の態度は余を威壓して、云はんとしても云ふ能はざらしめたのであらう。君子の德に洋の東西はない。司馬遷、眞に人を欺かずと云ふべしである」云々と。あゝ侃々諤々、口角泡を吹いて人倫五常を論ずるパリサイ的學者と、寡言敬肅如何にして此人に我信ずる神を顯はすべきかと祈禱しつゝ對坐し給へる老聖者の面影が目に見える樣である。孔孟の敎に通曉した儒者が、基督敎の精髓で鍛へ上げられた人物を引き來つて儒書の註解を試みるなどは、寔に興味ある問題ではないか。

何時頃の事であつたかよくわからないが、大津の敎會が或問題のために非常に葛藤を來たした事がある。是れは或意見の衝突で役員も信徒も兩派に分れ、牧師も其渦中に投じ長い間糴り合つたのであつた。勿論其間には他の牧師や宣敎師も屢々行

つて調停を試みたが、彼等は各々自己の主張を貫徹せんとして、中々相讓らない。愛を以て成立つてをる基督の敎會としては、實にあさましきまでに嫉視反目し、今や殆んど如何ともする能はざるやうになつた。最後の調停の役をつとめたのは云ふ迄もなく、時の京都監督ウイリアムス翁であつた。翁が仲裁のため來られると聞くや、双方とも我先きにと事情を具陳して曲直を分ち、我勝つか彼敗るゝか、兎角此一擧に進退を決しやうと思つてをつた。翁は前以て何時何日に敎會に集るやうと通知して京都から直接其席上に臨まれたが、監督が「私は今日諸君から議論を聞くために參りません。どうか今私の前に一つの穴を堀つて、今日までの不平不滿を皆其中に入れて、埋めて仕舞つて下さい。キリストの名のために諸君に願ひます」と、敬虔にして然も權威ある態度にて申さるゝや、所謂鶴の一聲で、何人も其神々しき風姿と、主の敎會を思ふ赤誠とに對して、一言の苦情を申立つるものなく、數ケ月に渡つた紛擾は一夕にして氷解して仕舞つた。而して敵も味方も一となり感謝

の祈禱を以て分れたと云ふことである、是等は實に翁の德風が無爲にして人を感化したものと云はねばならぬ。

二四　高德の人

高德の人(三)

更に驚くべき一事は翁の高德の薫化が獨り人間に止まらず、動物にまで及んだ事である。夫れも犬や猫なら世の中にある話しで主人の愛に感じて忠義を盡した犬などはよくあるものだ。然るにこれはさうでない小鳥である。主が二羽の雀は壹錢にて售るにあらずやと少きものの例に引かれた其の雀である。

彼のアシシの聖者フランシスの傳を讀む者は彼れが屢々アシシの山間に小鳥を集めて說敎をせられた事を見るのであらう。聖フランシスが山間を行けば多くの小鳥は彼に尾いて飛んで來て、彼が憩へば其周圍に蝟集して何をか物語る如く、囀り歌ひ、聖者が口を開いて訓誨を垂るゝや、熱心に之を聽くが如くみえたと云ふことで

ある。こと餘事に亘るも餘りに興味深ければ讀者は此の聖者の「小鳥說敎」の一節を引用する事を許されよ。曰く、

我が愛する小さな兄弟達よ、お前達は神樣の御恩を澤山受けてをる。夫れ故何時でも何處でも、神樣を讃美するがよいぞ。神樣は何處にでも飛んで行けるやうに、お前達に自由を給はり、二重にも三重にも着物を下さつた。お前達は種もまかず耕しもしないのに神樣はお前達を養ひ、又水の飲める樣に川の流れや泉を下さつた。お前達が棲み隱れの出來る樣に山や谿、巢を作る樣に高い木、皆是神樣の賜であるぞ。お前達は紡ぎも縫ひもしないのに神樣はお前達に着せて下さる。神樣がどれ丈けお前達を可愛がつて下さるか、これで分らう。夫れ故、小さな兄弟達よ、お前達はこの御恩を忘れぬ樣にして常につとめて神樣を讃美しなければなりませぬぞ。

何と美くしい談ではあるまいか、其德禽獸に及ぶとは眞に此の類である。我がウ

（朝風博士の「花つみ日記」より）

イリアムス翁は、小鳥に向つて説教をせられたかどうか、夫れはわからぬが、實に此千古の聖者に比するに足るものがある。翁は何時も雀をこよなき友達として居られた。雀は朝夙くより翁の書齋の窓側に來り歌ひさゝめきて日用の糧を今日も與へ給へと神樣を讃美し、翁が朝の行事をすまして窓を開かるゝや、喜び勇んで飛び來り肩と云はず手と云はず、うるさい迄にとびついて止まり、翁がパン屑を掌に置けば爭ひ競ふて之れを嘴み、もつと下さいよもうありませんかと云ひ顔に見上げるのであつた。此時は翁もたしかにアシシの聖者の如く「お前達は幸福である。蒔く事をせず稼る事をせず、努めず紡がざるに天の父はなくてはならぬものを與へ給ふ。お前達は常に喜びの歌を謳ふて神樣に感謝せねばならぬ」とやうに敎へられたであらうと信ずる。然か信ぜざるを得ない。

明治四十一年四月廿八日、翁の歸國の途につかれた其翌朝、澤山の雀が翁の書齋の窓ガラスを打つて鳴きさゝめき、餘り騷々しいので、何事ならんとコックが行つ

て見れば、多くの雀が窓ガラスを目がけて飛びついては鳴き、鳴いては飛びつきしてをつた。これは彼等が翁を呼ぶ合圖であつたらしいが、悲しい哉、彼等の愛人は此時既に此地を辭して横濱に居られたのである。其後も毎日々々數羽の雀が窓のほとりに來てさわいで鳴いたと云ふことである。余は此事を聞いて左もありなんと感嘆せざるを得なかつた。翁は曾に我日本の基督敎史に最初の頁を飾る名譽ある開拓者たるのみならず、實に我基督敎史の千古萬古に誇りとすべき聖者である。余は斯る聖者が廿餘年の間足を留めたる洛陽の地の光榮を懷ふものである。

翁の平生(一)

二五　翁の平生

平生と云つても今まで記した所で大抵は推されるので、事新しく申す迄もないが、茲には遺補のつもりで二三の逸事を誌すことゝしやう。翁の平生に就て先づ記したい事は冷水摩擦である。今日でこそやれ冷水浴だの、冷水摩擦だのと

云つて、誰れでも盛にやつて居るが、翁は青年の時代から七八十歳の晩年まで、終始一日の如く實行せられ、決して休まれた事はなかつた。地方の巡回などに行つて信徒の宅に宿つた時などは、家人に請ひて必ず就寢前に桶や盥などに水を一杯に滿たして枕邊に置かしめ、どんな寒中でも結氷した其水で顏を洗ひ全身を拭き、何處でも何時でも之を廢せられなかつた。或所などでは家の者が氣を利かして此汲置きの水をこぼして井戸から汲立てのと取りかへたので、翁から「いけません私冷水すきです」とお叱りを蒙つた事もある位で、晩年には特に嚴格に之を實行せられたのである。是れ翁が粗衣粗食に甘じて、朝は六時より夜は十二時まで、四十年一日の如く精進努力せられても未だ曾て藥餌と親しまれた事なく、常に潑溂たる元氣と快活なる精神とを持て居れた大なる原因であつて、是れ眞に肉體を活る神の宮殿と心得られたからである。翁は非常に孩兒を愛せられた。吾等は彼の如く稚兒を愛し又兒童に愛慕せられた人を見ない。主イエスは到るところにて幼兒を愛し給ひ

常に稚兒を我に來らせよと宣ひて、膝に抱き頭を撫で、「孩兒の如くならざれば天國に入る能はず」とか「天國の人は斯の如きものなり」とか敎へ給ふたとあるが、ウイリアムス翁も實に天國の面影をこの孩兒の中に見出されたのである。彼は道行く時も子供が遊んで居れば、近よつて金米糖の二粒三粒を與へ其頭を撫で笑顏を見せて通つて行かれた。さうして訪問などせられた時は子供を膝に抱き上げて接吻せんばかりに之を愛撫し、互に覺束なき日本語を交換して此上なき慰めとせられた。最も面白い事は翁が何時もポケットに金米糖をたやされぬことである。是れは勿論子供にやる爲めであつて、道行く時、訪問の時、汽車の中、何處でも子供が居ればすぐポケットに手を入れて二粒三粒を掴んで、小兒の掌において莞爾と笑つて行かれるのが常であつた。時々街を行いて居つて、ット菓子屋の暖簾を潛らるゝ事があつたれはポケットに金米糖を仕入られるためであつた。少い事ではあるが、是等も常人に見られぬ事であると思ふ。

又翁は道傍に伏座て物乞ひをする乞徒などにも必ず何程かを惠んで行過られた。特に子供などつれた哀れな婦などには深く同情を表して、例の金米糖も與たり錢もくれたりせられるのであつた。或時の事である、東京の永代橋際に二組三組の物乞がをつた。翁は毎週築地から深川に通はれるので常に彼等に惠まれるのであつたが、或日一人の乞徒にはやつて一人のには何もやらずに過行かれた。同行の某氏が「監督さんナゼ彼奴にはおやりなさらぬのですか」と尋ねますと、監督は「アレ嘘です、あの子供此日の子供と違ひます。あの人惡い」と答へられたとの事である。是れは彼等の仲間にある借兒で、他人の子供を借り來りて憐れに見せかけ、人の惻隱の情に訴へんとする不屆者である。多くの人は其事あるを知れど、それを發見する者はない。否夫れ程までに注意して彼等の身の上を觀るものがないのである。

翁は前にも云つた如く眞の獨身者であつた。米國には姉妹がお在になつて甥や姪もあるが、翁は全く單身孤獨の生涯を送られた。夫で他人には實に寂寞なみじめな

生活の如く見えたが、決してさうでなかつた。實に聖書に所謂常に喜びことゝに感謝に滿てる生涯であつた。時々信徒等が訪問して「監督さんお獨で淋しう御座いませう」と問へば、翁は「いゝえ、私ちつとも淋しくありません、多くの友人あります。其友人私等よりは信仰の篤い德の高い方々です」と申され「そんな方は何人ですか」と問ひ返せば、監督は微笑て書棚の書籍を指さしながら、それ〳〵、其方がジョン・クリソストム、そなたがセント・オーゴスチン此方がセント・バージル、こなたがセント・フランシスなどと、著者の名前や其人の傳記を指名されるのが常であつた。

翁の平生(二)

二六　翁の平生

人間の常として、自己の經驗の以外の事に對しては兎角同情同感になりにくいものであるが、翁は其點に於て實に非凡にして、深く人情の機微に通

じ、眞に喜ぶものと共に悅び、悲しむものと共に哀しむの人であつた。結婚の如きは翁にとりては全く無經驗の事なるに、翁は婚禮の席などには喜んで出席し、左らぬだに恥らへる新郎新婦に冗談の一二も云つて、嬉しがらせる事位はよく見聞するところであつた。或時のこと某が京都で翁の司式で結婚し歸省するのでその新夫婦は監督の許にお暇乞に行つた、其時某は妙齡の妹をも同伴したのであつたが、餘談に入つてから監督は「やがて又結婚式があるさうです」と眞面目くさつて話し出された。某はハテナ夫れは誰ですかとこれも眞面目に尋ぬれば、翁は少さくなつてそこに座つてゐる妹を指して、此方ですと云て咄笑せられたさうであるが、監督の口から出ると冗談でも滑稽でも、恰も漉水器にかけた水のやうに清く、全く聖別された樣に感ぜられて、何とも云へぬ快感を禁じ得なかつたさうである。

ウイリアムス翁が、自ら居る謹肅、如何なる場合にも嚴正の態度を失はれなかつた事は、今日の青年の軌範とすべきものである。翁は壯年の時代は固より近年に至

る迄も婦人宣教師の許などには必ず人と伴に訪はれ、若し一人で行かるる場合には玄關で用を辨ぜられたさうである。京都に居らるゝ時の事である、用事のため屢々大阪のプール老女史を往訪れた事があつた。其時は何時もラニング博士を誘うて來られ、一人の時は決して內に上られず、立話しで用を辨ぜられたさうだ。人ありて其理由を聞くと、翁の答へがおもしろい。曰く「プールさんはムスメで、私はムスコあります」と。戯談の樣な事であるが以て如何に翁が意を用ゆる事の周到にして秋霜を以て自ら誡められしかを知るに足るであらう。今の信徒、動もすれば信に誇り愛に馴れ、遂に拭ふべからざる罪過を犯す、皆な此心掛なきに起因する。聖淨雪の如き翁猶斯くの如し、我等は翁の心事に倣うて、清貞純潔の德を完うしたいものである。

親睦會などで身分や地位の高い人が居れば兎かく座敷が改まつて、感興が湧かぬ者であるが、翁は日本の信者等と均しく親睦會や運動會には必ず出席せられ、實に

酒々落々共に笑ひ共に興じ座敷が白けるどころか、感興いよ〳〵深きを思はしめぬはなかつた。曾て東京上野公園で市内の聖公會聯合の大親睦會が開かれた事があつた。其時非常に眞似事の得意な某氏が、今は故人となられたチング博士の態度を席上の座興に演ぜんとした。やれ〳〵と友人は拍手したが、某は少しく躊躇つた、其時監督はおやりなさい〳〵と勸めた。某は聲に應じて起ち上り眞に迫れる一曲を演じて滿場の大喝采を博したが、サア大變、宣教師殊に婦人宣教師側から、謹慎がないの侮辱であるのと大反對が持上り、今まで和氣靄然たりし會場は大論爭の戰場と化してしまつた。監督はしばし默然として居られたが、やがて彼等宣教師たちに向て、私がわるかつた私が惡るかつたとあやまつて、さて「此處は親睦會であります」と注意したので漸くをさまつた事があつた。

二七　翁の平生

翁の平生(三)

前にも述べた樣に翁は卓越したる勤勉家で日本淹留の間恰も五十年、即ち一萬八千二百五十日、其中より一日の睡眠時六時間を控除したる卅二萬八千五百時間と云ふものは、專ら之を神國の建設のために使用せられたのである。翁は非常に集會を重せられた方で、如何なる時でも定時の集會を缺かされず嚴重に之を守られた。少し位氣分の惡い時でも大に都合の惡い時でも、難を押し障を排して出席せられた。他が或場合其困難を察して、如何ですかおやめになつてはと勸むれば、監督は答へて「私は自分の御飯を人に食べて頂く事は出來ません、そんな事をすれば私痩せます」と答へられた。之れは「勵みて主の業をなすこれ我が糧なり」との聖句を申されたので、この我が糧を人に食はすことはならぬとの意味である。宣教師と云へば我教役者たちはせつせと汗水を流して働いてをる七月の最中から、輕井澤の箱根の有馬のと避暑をして、秋風都門に滿つる九月半に歸つて來るのが通例なるに、翁は一度も避暑せられたことはなかつた。是れも例の自分の御飯を人に食

べさせる事が出來ぬからで、人が貴老もちよつと御避暑なさつては如何ですかとの勸告に對しては何時も此答へを以てせられた。さうかと云つて他の宣教師達が避暑する事に就ては決して一言も不平がましき事を云はれぬのみか、寧ろ之を奬勵してさあ〳〵お出でなされ、貴下等は大に働いて頂かねばならぬ體だ。遊ばんが爲に遊ぶのでない働かんがために遊ぶのだ、大に休養してお出でなさいと云ふやうに好意を以て之を行かしめた。這般事は凡夫には出來ぬ所である。努め勵みて主の業をなすこれ我が糧なり。自分の御飯を人に食つて貰ふとは出來ぬ。嗚呼古往今來、斯くも聖書を活讀したる人が幾人あるであらうか。吾等何物も翁に企及することは出來ぬ。が唯だ此聖書を活讀することなりとも、翁に學ぶところありて、聖書の一句一句を我物とし、これを品性の上に、行爲の上に活現することを得たいものである。

二八　翁の肖像

翁の肖像（一）

翁の風丰を想像する者は、何人も鶴軀痩影、西洋人獨特の身長き姿を豫想するであらう、所がさうでなかつた。西洋人としては寧ろ少身の方で、日本人としても中肉中脊の人と云つてもよい位であつた。而して幼時は所謂蒲柳の質で、隨分母上の心を痛められたさうであるが、長ずるに及んでは深く攝生を重ぜられた結果、非常なる健康者となり、生涯殆んど病のために枕に就かれた事はなかつた。腕力なども仲々つよく巡回傳道の時など偶々信徒が翁の旅鞄を提げて其重量に堪かねたのに、翁は易々と片手に提げて五町も十町も平氣で歩かれるのは往々見ところであつた。曾て大阪傳道開始の當時、翁に同情して講義所開設に盡力し、自身も夫れが縁故で遂に新島襄氏から受洗せられた山本と云ふ人が、其後三十餘年振りに翁に邂逅ひ、久濶を謝して信仰の生涯に入りしを感謝し、秘藏の立派なステッキを進上せんとした。翁は當時七十餘の高齡であつたが、『お芳志は有難う、私歳は寄つても心青年です』とて之を辭せられたさうである。翁はイエス、キリストと云ふ杖の

外肉體のために生涯ステッキを用ひられたことはなかつた。

我が名我が業之を美にし之を大にし、百代の後にも傳なむと焦るは凡夫の常である。古人は君子は聲聞の誠に過ぐるを恥づと曰へり、況んや偉人聖者と云はるゝ人は其事効の世に現はれんことを畏れ、其痕跡を世に遺さざらんことを努めしは、古來其例に乏しくない。我ウイリアムス翁も其所業事蹟の世に公にせられんことを畏れられた事は一通りではなかつた。夫れは翁が自己の肖像を此世に遺さざらんと努められた事によりても證據さるゝと思ふ。是れに就ては種々の記すべき事がある。

翁の肖像と云ふものが今日我國に遺つてをるものに唯だ二種ある。其一つは東京の杉浦義道氏の所持せらるゝ油繪と、他は明治十三年大阪に開かれた聖公會第一回大會の際の紀念撮影の中にある翁である。翁は寫眞を撮る事を非常に嫌はれて我國在留の間此紀念撮影を大勢の人と共にせられた外一度もレンズの前に立たれた事はなかつた。翁を崇拜する有ゆる人士は、幾度か紀念として其寫眞を懇請したが、翁

は一向に聽許給はなかつた。であるから誰れも翁の寫眞を持つて居るものはない。翁の寫眞を得んとして大に苦心せられた一の逸話がある。曾て聖公會の女教師にリーリックと云ふ人があつた。此人は翁の紹介で長老教會のホワイトと云ふ宣教師に嫁いだ人であるが、大のウイリアムス翁崇拜で、頻りに翁の寫眞を懇願したが、無いものは仕方がない。一度撮つて下さいと云つても勿論聞入れられぬ。そこで尋常一様では行かぬと思ひ、米國に註文して密撮寫眞械を購入た。これは襟飾の釦がレンズになつて居て、懷中に器械を裝置し、對談中にコッソリと撮影するものである。是れを以てリーリック女史は熱心に其の機會を捉へんとしたが、其時を得ざる中に夫と共に歸國する事となり遂に愈々出立の日となつた。翁は彼等夫婦を新橋に見送つた。滊車は將さに發せんとする、翁は車窓にそふてプラットホームに立つて居られる。女史今は此れ迄なりと一撮を試みんとしたが、翁が鍔廣の制帽を目深く覆つて居られるので『監督さん、もう永いお離別となるかもしれませんどうぞ帽子をと

つてお顔を見せて下さい」と云つた、監督それと悟つたものと見え、「宜しい」と云ひさま、右手に鍔を握りて前に引き、顔を覆ふて仕舞つた。滝笛一聲、衣を裂くが如く鳴りて、恨千秋につきざる離別は演ぜられた。斯くして女史の心盡しも水泡に歸し、翁の寫眞は遂に世に貽らなかつた。現に翁の肖像として世に流布してをるものは前記第一回大會の紀念撮影の中から豆粒よりも少な翁の顔を引のばして複寫又複寫したもので、聖者の面影を偲ぶべく餘りに不完全なものである。殊に夫れが三十餘年も以前、五十歳前後の物なるに於てをやである。

二九　翁の肖像

翁の肖像(二)

杉浦氏も亦熱心なる翁の寫眞の渇望者であつた。然るに之は迚も應はぬ望である。そこで氏は自身が少しく洋畫の趣味あるを幸ひ、健氣にも密かに翁の肖像畫を自ら試みんと決心した。之は翁の東京築地時代の事である。聖者の像を

畫くことは其傳記を書くよりは慥かに至難の業である。一度此決心を起したる氏は成るべく多く翁に接するの必要がある。そこで彼は朝でも夕でも用事に詫けて翁の書齋に至り、仔細に其の容貌を研究しては己が室にかへりてカンバスに向つた。而して或は友を集めて批評訂正を請ひ、或は色の配合に人知れぬ苦心をするなど、殆んど寢食をも忘れて多數の日子と精力とを傾盡して、やつとの事に一の肖像が出來上つた。是れが即ち同氏の秘藏せらるゝ油繪で、翁の面影を傳ふる上に於て前の引延ばし寫眞にまさるは萬々である。後にこれが撮影されて二三の人に頒たれたるがこの遺す能はざりしものを貽した杉浦氏の苦心は實に多とすべきである。猶ほ數年前聖公會の信者で河久保とか云ふ洋畫家が、是等の寫眞や、畫像やを基とし、翁にも面接して畫いた肖像があるさうである。これも珍とすべきものであらう。

右の外、米國に於て東洋傳道のため遠征の途に上らるゝに際し、母君に遺された寫眞が今日、翁の母校たるヴアヂニア神學校にあるさうである。予は某雜誌で其縮

寫の挿圖を見たが、廿九か三十歳の寫眞であるから偉風颯爽として、勇爲敢行の英資は其眉宇の間に表れ、當年の意氣、見る者眞に一種の氣呵に打たるゝものがある。予は此寫眞を見て翁の献身的生涯ある宜なる哉と思はざるを得なかつた。思ふに是れは翁が進んで撮つて母君に殘された寫眞であらう、何となれば夫の我が維新の志士が身命を賭して海外に赴かんとし、決然去郷天涯向生別又兼死別時〟と歌ひし心事は即ち翁の心情であつたからである。斯くの如く翁は自分に關して何物もこの世に殘さゞらんことを努めた。世或は之を以て極端であると評するであらう。又寫眞を撮つたからとて、偉人たり聖者たる資格に増減はなからうと云はるゝであらう。翁は偉人聖者たらんが爲めに爾せられたのではなく、神に對し、人に對する謙遜から來てをるであらうと信ずる。されば夫等の批評は翁とは全然沒交渉である。

三〇　翁の著書

翁の著書

翁は非常な讀書家であつて旅行其他事故のない限り、日々數時間の讀書をせられた。從つて博學洽識、科學哲學に亘りて造詣甚だ深く、特に宗教上神學又は聖書學には蘊蓄せらるゝ所が非常に深かつた。左れば日本の教師等が如何なる質問を出しても、外の宣教師が困り切つてをる難問に、翁は明瞭に教示せられ、未だ曾て知らないと仰せられた事なく、然も其答へらるゝや、幾冊の參考書を書架から抽出して來て、何某は斯く云うてをる、何某は斯く論じてをると、一々大家の意見を引いて自説の獨斷にあらざるを知しめ、根本的の解釋を與へて聽く者をして安心せしめたと云ふことである。

斯く博學であつたに拘らず、翁は一向著述と云ふことをせられなかつた。其頃の日本に於て翁が各方面の智識を發表して書籍とせられたならば、隨分社會人心を裨益したに相違ないが、ウイリアムス翁は敢て之に手を染められなかつた。これは云ふ迄もなく翁が名利の外に生活せられたからで、名が出ると自然何の彼のと社會に

曳出されるのを恐れられたるが爲めと、今一は我が天職は傳道にして唯此一事より外に自分のなすべき事業はないと確信せられたからであらうと思ふ。左ればこそ翁も傳道のためには衷情已む能はずして筆を秉られた事もあるのである。今日翁の著述として傳はつて居るもの丶中で「排謗小言」「聖餐の友」「敎會歷史」「聖書讀法」「主禱問答」「使徒信經問答」「十誡問答」などは尤も敎界に流布してをる者で、云ふまでもなく是等は傳道の一助とすべく著されたものである。但し第一の「排謗小言」は明治の初年耶蘇敎に對する嘲罵讒謗に對して傳道者として默し難き所ろより、筆を取つて其非を闡明したもので當時未だ日本語に熟達せられぬ時の事なれば、先づ英語に綴り、夫れを和歌山義一と云ふ人が飜譯したものである。所が是れは同氏が譯了するや二度迄でも火災に逢ふて灰燼に歸し、三度目の譯が初めて書になつたと云ふカアライルの佛蘭西革命史を思ひ出さずには居られぬ履歷つきの本である。今より見れば幼稚なものに違いないが、當時は幾分の反響があつたと思はれる。唯だ惜

しむべきは名の現はるゝを好ない翁の事として少しも之を社會に汎布しやうとせず、筐底に納めておいて、來訪の知己や信者などに配與せられたに止まつた事である。因に此和歌山と云ふ人は米國に留學し、米國婦人（聖公會信徒）を妻とし、歸朝後は農商務省の大書記官などをした人であるが、後ち中風に罹り退職後は非常に不遇の身となり翁の厚き援助を受けて居つた人である。此書の飜譯も勿論其頃のことであらう。次に「聖餐の友」は信徒が空しく聖餐を守ることなからんために、靈的準備を說かれたもので反復熟讀すべき敬虔なる書である。又た「敎會歷史」は上中下續で四冊より成り、初代並に中世敎會から、英國最初の聖公會、米國の聖公會、續いて日本聖公會と順々に問答體に編著したもので、殊に其「日本の卷」などは、自ら其事に當り其時に記した日記より材料をとつたものであるから、我國各派宣敎師の來朝の年月日、初期基督敎一般の出來事の時日など、尤も正確なもので、日本の基督敎史を編むものは、決して見逃すべからざる史料である。終りに一言すべきは是等

の著書に一として翁の署名のなき事である。卷頭の序文にも「著者識す」とは書てあるが其著者の名は卷末にも何處にも記してない。只發行人と書肆との名位なものである。何處までもウイリアムス式ではないか。

三一　歸國

〔歸國〕前にも誌す如く翁の歸國は明治四十一年四月廿九日で、第九回聖公會總會が大阪に開かれ、日本人監督敎區制定案や、敎務局案（聖公會の統一上大關係ある）が決定せられ、成功を以て終つた後三週日目であつた。翁は其會には列席せられなかつたが、京都から其模樣を傳聞して往時を追懷し、一粒の芥種が空の鳥を宿すばかりになつた、其成長を感謝せられたであらう。而して自分は最早其使命に堪へないまでに老衰せられるし、一方に我愛子（日本聖公會）の斯くまでに生長せるを見ては愈々歸國を決心せられたであらう。薄々それを聞知した一牧師が、萬望

初めの御決心の如く生涯を此地にてお送り下されと嘆願したのに答へて「余は日本に止まりて空しく座するを好まず、神樣は何處にありても我が祈を聞き給うべければ余は米國にありて日本のために祈るべし」とて一向に聞入れ給はなかつた。

翁は見送りとか出迎とか或は送迎會などを好まれなかつた。特に自分のためには固く之を辭してをられた。さうして夫れを逃れるために何處へ往くにも、何人にも告げずコツソリと出掛けられ、旅行先より歸るにも之を通知せられなかつた。これは斯る事のために人が貴重な時を費すのを惜しまれたからである。曾て米國に歸られる時なども夕方コックに「あのシャツは洗濯が出來ましたか明日入りますが」と云はれるので、夫れを出して上ると翌朝は早く出掛けられたが、これが米國に歸られたのであつた。左れば其日本を辭せらるゝに當つても、之を何人にも告げず、京都にある一二の宣敎師と極く昵懇の牧師の外は殆んど之を知るものはなかつたさうである。尤も中にはこれを傳へ聞いてお暇乞ひに行つた人もあつたが、翁は諄々と

して信仰談を試み、お歸國と承はりましたがと口を切れば「私歸らうと思へば明日でもかへります」と更に氣にも留められなかつたので、之が今生の離別と知りつゝも一言の別辭も述べ得ずして歸つたと云ふことである。斯て四月廿七日の朝瓢然として京都を去られたのである。出發せられし後翁の書齋に行きみるに、依然として少しも異ならず、一着の衣服、一枚の毛布、一冊の聖書と二三の必要品の外は秘藏の書籍も愛用の什器も其他凡て舊のまゝに存し、之れが歸り來ぬ人の出立の後とはどう見ても見えなかつた。爾曹何をも携へて世に來らず、亦何をも携へて往くことは能はずてふ聖句を思ふて、我等は其の清廉無私なる襟懷に驚かざるを得ないのである。

三二　永逝

永逝　歸國後の翁は其甥なるジョン・ハリソン氏の家に起臥し悠々閑々として

聖書を誦し祈禱を毎にし、全く聖徒の末期的生活に入られた。併ながら翁は猶ほ且つ我使命たる日本傳道を忘れ給はざりしと見え、我日本のために祈らるゝ事を怠り給はず、時には書を裁して日本にある多くの愛兒を奬勵し、或は彼地の信徒に日本傳道のために盡さんことを勸誘られたさうである。去る四十年の暮、名出牧師がリッチモンドに翁を訪問せられた時の如き、身心痛く消衰せられしかど、談一度日本の事に及ぶや、口角沫を飛ばして日本傳道の必要を論じ、傍らにある一神學生に「卒業の上は日本に往け、日本に往け」と叫ばれたさうである。

斯くて四十一年も神の恩籠の中に平和なる日子を送られ、家人に佐けられては其幼時屬せられし會堂に行き神を拜し、衆庶の尊敬を一身に集められしが、四十二年の夏も半ばを過ぎ梧桐一葉飜つて秋の來らんを告る頃には老病遂に立つ能はず、市のジョンストン・ウイリス病院に入られて篤き看護の裡に護らるゝ身となつた。聞く所によれば入院後は日に〳〵意識を失はれ自身の米國にあるをも忘れて常に日

本語を語り、看護婦が當惑したと云ふことである。然し是れは實に翁が如何に念頭日本を忘れざりしかを證するもの否肉體は米國にあるも其靈魂は磅礴として我國の上にあり我國を守れるを證する者である。恰も在米中の元田作之進氏の訪問記は在院中の翁を寫し得て眼前見るが如き感あらしむ。左に之を抄記して見やう。

案内に導かれて其病床の傍らに立つた、殆んど天使の病めるが如き有樣にて平和に寢臺に横はり、手足を動すことなく、聲を發することなく誰彼の識別もつかず。多くは目を閉ぢて安らかに眠りをらるゝが如し。傍らに立ちて「日本の元田です、記憶せらるゝや」と幾度か繰り返して問ひしが、頻りに見つめて、漸く口を開き、忽ちにして笑顔となり、右の手を靜かに出して握手を欲せられ、握手幾分、容易に放つを好まざるものゝ如く見えた。看護婦が傍より「御記憶ですか」と二度も三度も問返せしが、夫れに對しては少し顔を左右に振られたかの如く見えたれど、笑顔と云ひ、握手と云ひ、意思の疎通したるは慥かである。嗚呼人生五十年を我日

本に献げられたるこの老監督。今は病床に横はりて神の召を今か今かと待ちつゝある。善き戰を戰ひたる老將軍、神は必ず最上の榮冠を彼に與へ給うであらう云々。

これは四十三年十一月七日、即ち永眠前二十五日の事である。

其後は日一日と病革まり行き、遂に十二月二日午前三時と云ふに、聖徒の臨終にふさわしき限なき平安を以て、晏然として眠るが如く天國の人となられた。實に奥野昌綱翁と同年月日で然も殆んど同時刻である。是れを時差より云へば相違はあるが、神は吾等の記憶に便にせんため、斯くも同年月日に召し給うたのではあるまいか。葬儀は翌三日正午リッチモンドのモニメンタル・チャーチに於て監督諸牧師博士及び親戚舊知等の限りなき愛敬と、勝利に對する感謝讃美の裡に行はれ、遺骸は多くの大統領と、多くの監督とを葬れるを以て有名なるハレーウドの墓地に、母君と弟妹たちとの傍らに悠久の休みに入られたのである。

嗚呼斯して水清く山青き我が洛東若王寺の山頭に葬らるべく、我も人も豫期して

をつた聖徒の面影は瓢然去つて、新英洲幾多信仰の勇者の英魂磅礴たる、幽邃閑雅の地に其の影を沒した。左れど其靈は來りて我國に止まり、我國信徒の心碑に活きて永劫に隱れたる力となるであらう。

老監督　終

不許複製

大正四年七月二十三日印刷
大正四年七月二十六日發行

著作者　有富虎之助
發行者　東京市麹町區有樂町三丁目二番地　三宅正彦
印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉
印刷所　東京市京橋區銀座四丁目一番地　福音印刷合資會社東京支店
發行所　東京市麹町區有樂町三丁目二番地　紅潮社
（電話新橋八四七）

二定價金廿五錢二

325
364

終